

デーファ劇映画大事典

東ドイツ製作劇映画の全記録

1946～1993年

〈下〉

M-Z

F. B. ハーベル編著

レナーテ・ビール共著

【監】＝監督　【共監】＝共同監督　【助監】＝助監督　【脚】＝脚本、脚色、シナリオ　【原】＝原作　【撮】＝撮影　【共撮】＝共同撮影者　【特撮】＝特殊撮影　【アニメ】＝アニメーション映像　【音】＝音楽　【協】＝協力（作品の構想、シナリオ作成、選曲、編曲等）　【衣】＝衣装　【美】＝美術監督（大道具、小道具を含む）　【編】＝編集　【編務】＝編集事務　【注】＝注釈　【制】＝制作者、制作主任　【長】＝作品の長さ（「m＝メートル」及び「分」表記）　【仮題】＝制作開始時に仮に付けられた作品名　【原題】＝制作開始時に付けられた作品名　【TV放】＝テレビでの最初の放映日　【制社】＝制作会社、制作グループ　【共制】＝共同制作会社　【委託】＝制作等の委託会社　【配】＝配給会社（主にデーファでない場合）　【仕上】＝仕上げ加工　【封切】＝映画館等での上映開始日　【場所】＝封切りされた場所（映画館等）　【出】＝出演者　【ナレ】＝ナレーション　【歌】＝歌唱

brw＝ワイドスクリーン

cine＝シネマスコープ（アナモルフィックレンズ使用のワイドスクリーン）

lto＝光学サウンド

4kmgf＝4チャンネル磁気テープ録音

mgt＝磁気テープ録音

6kt＝6チャンネル録音システム

Tovi＝トータルビジョン（東ドイツ独自のシネマスコープ）

標サ＝標準サイズ

- ・日本で一般公開済み、あるいは特集上映等で既に邦訳の題が使われた場合、また有名な文学作品の映画化については、それらの題名を活用し*印を付記した（ただし表記の一部変更も含む）。
- ・ドイツ語以外の映画の原題名（露語、チェコ語等）には日本語訳を付けていない。
- ・人名、地名、国名等のカタカナ表記は、日本で広く使用されているものを最優先したが、基本的にはドイツ語の発音に近い形にした。
- ・写真のキャプションでは、特記の無い場合、人物名は左から記載している。
- ・「批評」の典拠について、原書の通り批評家名をイニシャルや仮名等で表記している場合がある（例えば「J. B.」「H. U. E.」「emjot」「mtr.」「-Kell」等）。

上卷

A 8
B 71
C 129
D 148
E 184
F 226
G 286
H 335
I 387
J 411
K 444
L 504

下卷

M 558
N 629
O 652
P 663
Q 690
R 691
S 738
T 888
U 944
V 976
W 1008
Z 1051

付録 A 1080
付録 B 1101
付録 C 1114
付録 D 1129

日本語版刊行によせて 50年に及ぶ東ドイツ劇映画の歴史

1946年5月17日。第二次世界大戦終焉の約1年後、ソ連占領地域でドイツ映画株式会社、略して「デーファ」が設立された。12年間のナチス独裁政治に終止符を打つドイツ映画の再出発を意味する。早くも1946年10月14日には、デーファ製作劇映画第1回作品でドイツにおける戦後初の劇映画『殺人者は我々の中にいる』が完成。監督はヴォルフガング・シュタウテ、ドイツ映画を代表する大女優ヒルデガルト・クネフが主演、ベルリンのドイツ国立歌劇場で封切られた。1990年のドイツ再統一後、デーファが民営化されるまでに700本以上の劇映画が製作された。

この度初めて日本語に翻訳された当大事典は上記全作品のあらずじ、映画批評その他映画史的分類等の基礎資料を提供する。これらの情報はドイツ映画の研究者であり評論家のフランク＝ブルクハルト・ハーベル氏が整理して纏めた。本書はデーファ設立70周年を記念し、デーファ財団の協力の下にハーベル氏が長年調査した成果に大量の写真を添えて上下2巻の大事典として出版された。映画研究者のみならず学生や映画ファンにとって必要な参考文献として、多くの図書館にも所蔵されているデーファ劇映画に関心を持つ人々の必読書である。当大事典の日本語訳書を出版したいと聞いて当財団前理事長のラルフ・シェンクが歓迎した時と同様、翻訳が実現に至ったことを大変嬉しく思う。これまで本書の貴重な情報がドイツ語の分かる読者にしか利用できなかったのが、今や日本語でも多彩で興味深いデーファ劇映画の全体像を概観し、研究あるいは学習に活用することが可能になった。

デーファ映画の多くは、既に存在しない東ドイツの生活と日常を描いている。重要な歴史記録としてのデーファ作品の価値は今後ますます高まるだろう。とりわけ有名な作品には、例えば共同作業を重視する社会で「ソロ」出演のために努力する東ベルリン出身の売れない女性歌手について描く『ソロシンガー』(1980 監督コンラート・ヴォルフ)、あるいは「カルト映画」の古典と呼ばれる『パウロとパウラの伝説』(1973 監督ハイナー・カーロウ) —社会的立場の異なる男女が恋に落ちるといふ情熱的な恋愛ドラマ— がある。また国際的知名度の余り高くない東ドイツのいわゆる現代劇映画も発見できる。この場で紹介したいのは『みんな僕の彼女』(1980) という白熱電球製造工場で働く若い女性たちの毎日をリアルに表現する作品だ。演出のイーリス・グスナーは、デーファ劇映画撮影所で活躍したエフェリン・シュミット、イングリート・レシュケ、ハンネローレ・ウンターベルクと共に数少ない女性監督の一人である。

更にデーファは反ファシズム映画製作の長い伝統を持ち、ナチスの犯した悪行を繰り返してはならないと警鐘を鳴らす。観客動員数最多を記録するクルト・メーツィヒ監督の『日陰の結婚』(1947) は、—ナチ政権下で自死に追いやられたユダヤ人俳優夫婦ゴットシャルクを追想— 封切り後の短期間に1千万人以上が劇場に足を運んだ。文学の映画化『嘘つきヤコブ』(1974 監督フランク・バイヤー) はアカデミー賞にノミネートされた唯一のデーファ作品。また反ファシズムがテーマでカンヌ映画祭に公式出品されたコンラート・ヴォルフ監督の『星』(1959) は、当時としては極めて斬新な映像様式でホロコーストの恐怖を露わに表現している。

デーファの製作費は国家予算で賄われたため、「社会主義的国民」の教育に貢献すべきプロパガンダ映画も数多く作られた。その頂点にあるのは強制収容所で死亡した元ドイツ共産党議

長の一生を翻案した2部作『エルンスト・テールマン—階級の息子』(1954)、『エルンスト・テールマン—階級の指導者』(1955) である。

国家政策の影響とは別に、東ドイツの映像作家たちは自由な芸術制作の可能性を探った。イタリアのネオレアリズモ的傾向の強い『ベルリン シェーンハウザーの街角』(1957 監督ゲアハルト・クライン) は激しい批判に晒された。1965年のドイツ社会主義統一党第11回中央委員会の決議により、1965年と1966年にデーファで製作されたほぼ全ての作品が禁止となった。社会に順応しない建設作業班を巡る『石の痕跡』(監督フランク・バイヤー) と、生徒を自由で自立した人間に育てようとする女性教師について描いた『カルラ』(監督ヘルマン・チョッヘ) はベルリンの壁崩壊後ようやく公開に至った作品だ。禁止された映画や部分的に破棄された未完成の作品も本書では紹介されている。

デーファ劇映画撮影所で製作された作品群の中で極めて重要なのは児童映画である。ロルフ・ロザンスキー、ヘルムート・ジュバ、ヴァルター・ベックは監督としての生涯を若い観客向けの作品に捧げた。中には国際的に注目を浴びたメルヘン映画もある。チェコスロバキアとの合作『灰かぶり姫の三つの願い』(1974 監督ヴァーツラフ・ヴォルリーチェク) は「クリスマス映画」として東西両ドイツで人気が高く、今も毎年クリスマスが近くなるとテレビで全国放送されている。

もちろんデーファには娯楽作品も多く、映画ジャンルのほぼ全てを網羅 —オペレッタを70mmで撮影した豪華な色彩映画『地獄のオルフェ』(1974 監督ホルスト・ボネット) から、スタンリー・キューブリック監督『2001年宇宙の旅』の様式に倣ったSF映画『シグナル—宇宙の冒険』(1970 監督ゴットフリート・コルディッツ)、そして「アメリカ西部」を舞台に抑圧された北米原住民の味方として活躍する東ドイツのスター俳優ゴイコ・ミティチ主演「デーファ・インディアン映画」に至るまで幅広く提供する。

最後に、本書が東ドイツで製作された劇映画に対する日本の皆さんの関心と呼び起こし、未知の映画史をひも解ききっかけとなれば何より嬉しく思う。

2022年11月 デーファ財団理事長 シュテファニー・エッケルト

シュテファニー・エッケルト (Stefanie ECKERT)

1980年ベルリン生まれ。バーベルスベルク映画大学でメディア学を専攻。2001年よりデーファ財団で研究員として主にドイツ統一後の同機関設立までの過程について調査研究を行う。長年に亘り理事長代行兼広報担当を務めた後、2020年夏にデーファ財団理事長に就任、現在に至る。

M

DAS MÄDCHEN AUF DEM BRETT

『飛び込み台の少女』

【監】クルト・メーツヒ 【脚】ラルフ・クネーベル、クリステル・グレーフ 【撮】エーリヒ・グスコ 【音】ゲアハルト・ローゼンフェルト 【美】ディーター・アダム 【衣】カトリン・ヨーンゼン 【編】ブリギッテ・クレックス 【制】ハインツ・ヘルマン 【制社】グループ「ローター・クライス」 【長】2612 m=96分、モノクロ、1966年制作 【封切】1967年2月16日 【場所】ベルリン、「コスモス」 【出】クリスティアーネ・ランツケ（カタリーナ）、クラウス・ピオンテック（ペーター）、ハンヨ・ハッセ（クレム）、モニカ・ヴォイトヴィチ（クラウディア）、イレネ・コルプ（カタリーナの母）、ノルベルト・クリスティアン（国語教師）、ギュンター・グラッペルト（トレーナーのkoln）、ヘルガ・ゲーリング（化学教師）、イルマ・ミュンヒ（エポリ）、フリッツ・マルクヴァルト（テオ）、アグネス・クラウス、ヴォルフガング・ヴィンクラ、ハーラルト・モズドルフ、ヴァイリ・ノイエンハーン、ヴェルナー・ヴィーラント他

ストーリー：18歳のカタリーナ・イエンスは既に輝かしい競技歴を持つ飛び込みの選手。国際大会でチームの勝利を確実にするため、急に欠場することになった仲間のクラウディアに代わって1回転半宙返り2回ひねりという高難度の技を求められる。しかし彼女は上手く飛ぶことが出来ない。周囲からは失望と共に彼女の演技力に対する疑問の声も聞かれる。そこでトレーナーのkolnは彼女に —じっくり考える時間として— 1週間の休息を言い渡す。カタリーナはこの決定に落胆するが、この間様々な人との出会いがある。例えば演出家のクレムと恐怖心とは何かについて話し助言を得る。また若いペーターと出会って一目惚れ。彼は彼女に心から寄り添い、それまでの自分を乗り越えるきっかけを与えてくれる。

解説：クルト・メーツヒ監督の第1回作品は、壊滅的上映禁止の波を経た後デーファ社300本目の作品として記録に残る。リアルな始まりにも関わらず、理屈っぽい対話と映像的要素の間にズレが生じて映画は纏まりに欠ける。東ドイツの体操スポーツ協会幹部からは当初メーツヒ監督に、主人公の自己疑念が描かれているのは受け入れ難いとの批判が出された。

批評：この映画の魅力は対立と克服のテーマがスポーツを超えた他の領域にまで広がっていることだ。我々の社会においては個人に対して更に高度な課題が求められ、その実現が必要とされる。そのための前提は、我々の新しい社会の人間関係においてこそ最も良く整えられていると言える。(…)脚本の持つ弱点が露骨に表れていないことについては、彼(クルト・メーツヒ)と撮影のエーリヒ・グスコにも感謝すべきだろう。脚本にある会話は、たとえ知的水準の高い内容であっても、所詮は言葉による表現で映像に変換するには不向きなものだ。(1967年2月21日 マンフレート・イエレンスキ博士、「ベルリン新聞」)

主演女優が自らスポーツ選手の動きを表現できる。この長所は映画の

ドキュメンタリー的側面を支えていることは明白だ。飛び込みのシーンでクリスティアーネ・ランツケの顔が映し出される時、観客は一人のスポーツ選手の顔を見ているので女優の顔を見ている訳ではない。練習や試合の際の彼女の個性的な振る舞いは非常に魅力的で、観客はこの映画の主人公に対して感情的な繋がりを築く。(1967年 ペーター・ラーベンアルト、「映画研究報告2」)

飛び込み競技の名手をドキュメンタリー的に描く白黒映画。抜群の技と力を持つ主人公が内面に抱えるコンプレックスと葛藤から始まり、怖れと自己意識、責任とモチベーションのテーマに行き着く。(1994年 クラウス・ヴィッシュネフスキ、『Das zweite Leben der Filmstadt Babelsberg [映画都市バーベルスベルクの第二の生]』所収)

飛び込み選手カタリーナ・イエンスの突然のスランプの物語は、社会主義社会におけるスポーツ一般の持つ意味を独特の視点から問う。更にスポーツ映画とは何か、社会主義的観点から答えを追求し、一人の若い女性の自分自身に対する問いかけと彼女に対するチームの期待と要求を巡る葛藤を描いている。(2014年 ミヒャエル・グリスコ、「ツォイクハウス映画館プログラム9-12」)

コメント：ポツダム出身の飛び込み選手クリスティアーネ・ランツケは「エムポーア・ロストック」スポーツクラブ所属。1962年のヨーロッパ選手権で飛び板飛び込み2位、1964年の東京オリンピックでは高飛び込み5位であったが、肩の故障のため19歳で選手生活を終える。主演を演じた『飛び込み台の少女』の後バーベルス映画大学で演劇を学び、ハレとグライフスヴァルトの劇場で活躍し、小さな役で映画にも出演した。

-当作品はもっぱらロストックでロケ撮影され、街の名所が幾つも登場する —その一部はこの間すっきり姿を変えてしまった。ラング通りのアイスカフェ、石門、クレペリナー通り、シュレーダー広場のカトリック教会、市庁舎、ハンザ映画館等。ヴァルデミュンデへのドライブと港の遊覧船。当時ロストック市の「ネプチューン室内プール」はヨーロッパで最も近代的な施設として知られていた。

DAS MÄDCHEN AUF DEM TITELBLATT [表紙に出た少女]

DAS MÄDCHEN AUF DER TITELSEITE [第1面に出た少女]

→付録Cを参照

DAS MÄDCHEN AUS DEM FAHRSTUHL

『エレベーターで来た少女』

【監】ヘルマン・チョッヘ 【脚】ガブリエレ・ヘルツォーク、ハツ・ハルトマン 【原】ガブリエレ・ヘルツォーク作 同名物語 【撮】ディーター・ヒル 【音】ヨハネス・シュレヒト 【美】マルレーネ・ヴィルマン 【衣】インケン・グスナー 【編】モニカ・シンドラー 【制】ラルフ・レッツラフ 【制社】グループ「ローター・クライス」 【長】2617 m=96分、カラー 【仮題】Mädchen im Fahrstuhl (エレベーターの少女) 1989/90年制作 【封切】1990年1月10日 【場所】ベルリン、映画館「フェリクス」 【出】ロルフ・ルコシェク (フランク)、バルバラ・ゾマー (レギーネ)、カーリン・グレゴレク (校長)、モニカ・レンナルツ (担任教師)、リタ・フェルトマイアー (フランクの母)、ハンス・イェルン・ヴェーバー (フ



クラウス・ピオンテックと
クリスティアーネ・ランツケ

ランクの父)、ヤン・オボチンスキ (マティアス)、マクシミリアン・レーザー (ベッカー)、マルティン・ザイフェルト (酔っ払い)、ペーター・フリードリヒゾン (管理人)、シュテファン・マルティン・ミュラー、ゲルト・グラッセ 《子役》クリスティアン・アンデルス、ミヒェレ・ヘルマン、フィリップ・ティーツ他

ストーリー: フランクは義務教育 10 年目の将来有望な生徒。数学が得意で自由ドイツ青年団 FDJ の書記を務める。父は工場長をしている。クラスにレギーネという女生徒が転校してくる。ベルリン中心部のフィッシャーインゼル地区にある彼の住むアパートに越して来た。彼はエレベーターの中で初めて彼女に出会う。フランクは彼女が好きになる。レギーネが学校を無断欠席した時、彼は彼女を助ける。そして彼女が複雑な家庭環境に居るのを知る。母親が入院中で、彼女は 3 人の弟妹の面倒を見ている。それぞれ違う 4 人の父親は皆知らん顔。お金も余り無い。フランクはレギーネを助ける — 個人的な事も学習の面でも。しかし彼女の成績は良くない。彼女には保母になりたいという夢があり、素質も備えているが専門教育への道は閉ざされる。レギーネのため、フランクは学校に強く抗議するが徒労に終わる。更にフランク自身 FDJ から除名されてしまう。この事件でフランクの将来は危機に陥るところだったが、父親の執り成しで無事に乗り切りドレスデン工科大学の特別奨学生となる。フランクは町を離れ、レギーネは残る。

解説: ヘルマン・チョッヘ 20 作目の映画は、彼のデーファ社での最後の仕事となった。1988 年当初、シナリオは特権階級の人々にとって教育体制に対する批判は好ましくないという理由から不採用になった。しかしデーファ社上層部に異動があり、その後ようやく受け入れられた。

批評: 撮影と同時期に起こっていた社会の大変動に全く気付かなかったかのような彼 (チョッヘ、f.b.h.) の映画は、それ相応の単に回想するような仕上がりになった。意識的に関わろうとしない態度こそ、ひょっとすると彼の最も憂慮すべき意思表明なのかも知れない。(…) くだらない演出は展開を容易に予測させ、未だ発見すべきものが残っているのではという予感を示すことなく映像が全てを表現している。ただ言葉の洒落が所々で輝き、芸術家としての無気力感を突き破っている。(1991 年 ローラント・ルスト、「映画サービス 2」)

この映画は 2 年前ならそのシンボリックな力量故に太鼓が鳴り響く程の大騒ぎになっていただろう。対立と会話とインテリアが狭苦しい田舎の雰囲気醸し出している。フランクが将来の仲間を訪ねていくコンピュータ室は、彼の逃避地、精神的亡命の場所のように見ることが出来るだろう。(…) 以前のより優れた作品から分かるように、ヘルマン・チョッヘは今回も人間を取り巻く状況を入念に描いているが、多少控え目でゆっくりと手間のかかる感じは否めない。(1991 年 ラルフ・シェンク、「フィルムシュピーゲル 4」)

コメント: 『エレベーターで来た少女』でパン屋を演じているマクシミリアン・レーザーは、チョッヘ監督の『SIEBEN SOMMERSPROSSEN (七つのそばかす)』(1978) で青少年キャンプ村責任者の役を演じて有名になったクリスタ・レーザーの息子である。

EIN MÄDCHEN AUS SCHNEE [雪の少女]

→付録 A を参照

DAS MÄDCHEN CHRISTINE

『少女クリスティーネ』

監: アルトゥル・マリア・ラーベンアルト **脚:** フランク・クリフォード **原:** ハンス・ラブル作同名短編小説 **撮:** オイゲン・クラゲマン **音:** ヘルベルト・トラントウ **美:** エミール・ハスラー **衣:** ヴェルナー・シュルツ **編:** ヒルデガルト・テゲナー **制:** ヴァルター・レーマン **長:** 2606m=96 分、モノクロ、1948 年制作 **封切:** 1949 年 1 月 14 日 **場所:** ベルリン、「バビロン」 **出:** ヴォルフガング・ルクシー (メーリアン)、ペトラ・ペータース (クリスティーネ)、ティリー・ラウエンシュタイン (クラッシュ)、イルゼ・ヒュルパー (ウィンタートン婦人)、ゲアハルト・フリックヘファー (ヤコブ)、ハンス・エモンズ (大尉)、イヴォンヌ・シュトゥルム (バルバラ)、ギード・ゴロル (秘書)、エーリヒ・ドゥンスクス (メルヒオル)、マリア・ミルデ (ラウラ)、ラインハルト・コルデホフ、ニコ・トゥーフ、フレート・クロンシュトレーム、ヴォルフガング・キューネ、ジャン・ブラン、トラウテ・ヴィーレ他

ストーリー: 30 年戦争の頃、孤児のクリスティーネは伯爵メーリアン大佐に恋をした。常に彼の傍に居るために彼女は男装をして軍事輸送兵となり、後には騎兵隊の旗手に昇格 — この秘密は従軍商人の女だけが知っている。クリスティーネは徐々に好きになった男が戦争によって粗暴になり、もはや正常な感情を持ってなくなっていることに気付く。ある日、百姓娘の代わりに自分がこの男に身を任せることになる。そして彼の凶暴さに恐怖を覚える。決闘の末、彼女は彼を撃ち殺す。騎兵として死刑を宣告されるが、一人の女として無罪を言い渡される。

解説: 当作品が公開された時、同じ歴史的背景を持つブレヒト作品『肝っ玉おっ母とその子供たち』がドイツで初めて上演され評判になっていた。両者を並べて比較するとは、この娯楽映画には予想外のことであった。あらゆる戦争行為に対して非難する内容にも関わらず、ドイツ社会主義統一党の一部から「ファシズム的思考を賛美している」との批判が出た。「傭兵の生活を共感すべき価値あるものとして描いている」というのだ。このような根拠を欠く非難を受けて、以後ラーベンアルトは再びデーファ社の仕事をする事はなかった。

批評: 血に飢えた不品行の傭兵たちの本性は数々の現実のシーンにおいて暴露されているが、従来通りの表現様式を踏襲している。上手く出来た魅力的な場面は多々見受けられるが、大部分は器用に纏められた型通りの域を出ない。この展開は、傭兵たちと従軍商人の田舎風の言葉遣いや露骨な拷問シーンにも続く。(…) しかし完成した映画はなかなか良く出来た秀作で、伝統に沿った室内劇として戦争は全て糾弾すべきだと説く見応えある作品だ。ラーベンアルト監督の生き生きとした演出と女優ペトラ・ペータースの控え目で渋みある演技に負うところが大きい。(1949 年 ペーター・エーデル、「ヴェルトビューネ 4」)

印象に残る映像美術。軽やかな演出。入念に構成され白黒のコントラストが際立つ映像。ラーベンアルトの専門家的な仕事により、機知に富んだ対話劇の形で一種の世俗描写が成功した。また戦争による精神の破滅については、後に巨額の予算を使って製作された叙事詩的作品より多くを詳細に伝えている。(1991 年 ノルベルト・ヴェアシュテット、「映画とテレビ 5」)

コメント: アルトゥル・マリア・ラーベンアルトは当時ベルリンのメトロポール劇場の支配人で、劇団専属俳優の何人かをこの作品に起用した。

- ラウラ役の女優は当時未だイルゼ=マリア・ミルデと名乗っていたが、後にマリア・ミルデ



『少女クリスティーネ』
主役ペトラ・ペータース

の名前で作家として活躍した。

EIN MÄDCHEN VON 16 ½ 『16歳半の少女』

【監】カール・バルハウス 【脚】イルゼ・チェヒ=クックホフ、カール・バルハウス、マンフレート・キーゼラー 【撮】ゲッツ・ノイマン 【音】ギュンター・クリュック 【美】アルフレート・トレ 【衣】ハンス・キーゼルバッハ 【編】ヘルガ・エムリヒ 【制】アレクサンダー・レッシュ 【長】2656m=97分、モノクロ 【仮題】*Das Mädchen vom Werkhof* (少年院の少女) 1957年制作 封切) 1958年5月16日 【場所】ベルリン、「コロセウム」 【出】ナナ・シュヴェプス (ヘルガ)、エーリカ・ドゥンケルマン (フリッチェ夫人)、ヘルガ・ゲーリング (ペータース嬢)、ヴォルフガング・シュトゥンプ (パウム)、ゲアハルト・ビーネルト (オスカー・ゲンツ)、ハルトムート・レック (ロルフ)、ウーヴェ=イェンス・パーベ (エーゴン)、エトヴィン・マリアン (ハンス)、ハンス=ヨアヒム・マルテンス (ミュラー)、マンフレート・クルーク (フレディ)、フレート・デルマーレ、ホルスト・ブーダー、ヴェルナー・ディッセル、ウルズラ・ケルプス、ゲルトルト・プレントラー他

ストーリー：ヘルガは戦争中に両親を失い、おばの下で育ったが、ある時そこから逃げ出した。夜のベルリンを徘徊し男たちと知り合い、最後に少年院に辿り着いた。ちょっとした脱走劇と一緒に試みたロルフは彼女に恋をする。しかしヘルガは夜の街で知り合った得体の知れないエーゴンが忘れられず、彼との楽しい生活を夢見ている。彼女は施設を抜け出しエーゴンに助けを求める。ようやく、あるバーで無一文の墮落したエーゴンを見つけた時、彼は彼女に売春を強要しようとする。この間ヘルガは充分成長し、それは自分の人生ではないと分かっている。自分の意志で施設に戻りロルフと再会する。

解説：従来デーファ映画で取り上げられなかった少年刑罰のテーマに思い切って取り組んだものの、脚本にも演出にも非現実的な箇所が多く見受けられる。1958年に開催された映画検討会議の中で批判されたのはこの映画の制作上の弱点ではなく、テーマの選択そのものであった。映画の主人公は道を誤った青少年ではなく、社会主義の建設に喜々として打ち込む若者たちが相応しいと批判された。

批評：青少年更生施設と登場人物の多くはかなり理想化され、様々な対立が忘れられたかのような。そもそもこの若者たちは、どのような経緯で法に触れる行為に走ったのか不思議である。また他方では、刑罰に服することがまるで喜びであるかのような描写が見られ、休暇

中には出来る限り多くの少年少女が行刑の恩恵に浴することを図らずも内心願いたくなる。(…)最後に極めて深刻な問いかけがなされなければならない。映画監督に求められる徹底性と綿密さと良心、更に思いやりを持ってカール・バルハウスは仕事に取り組んでいるのだろうか。それとも表面的でお決まりの手法で次から次へと撮影を進めているのではないだろうか。この作品は間違いなく怠慢な仕事の証である。(1958年 カール=エドゥアルト・シュニッツラー、「フィルムシュピーゲル 12」)



『16歳半の少女』エトヴィン・マリアンとナナ・シュヴェプス

コメント：主演は元タレナーテ・シュヴェプスという17歳の女優。しばらく経って西ドイツに移住し、ナナ・オステンの名前で1960年代前半まで映画に出演していた。

MÄNNER OHNE BART 『髭のない男たち』

【監】ライナー・ジーモン 【脚】インゲ・ヴェステ、ライナー・ジーモン、ゲートルン・ドイベナー 【原】ウーヴェ・カント 作小説『Das Klassenfest (クラスパーティ)』 【撮】クラウス・ノイマン 【音】ペーター・ラーベンアルト 【美】ゲオルク・ウラツェ 【衣】ヴェルナー・ベルゲマン 【編】ヘルガ・ゲンツ 【制】アレクサンダー・レッシュ 【長】2224m=82分、モノクロ、1970年制作 封切) 1971年5月20日 【場所】ベルリン、「コロセウム」 【出】ヘルマン・バイヤー (ニッケル先生)、マンフレート・ベーム (オットー・ヒンツ)、ケーテ・ライヒェル (ヒンツ夫人)、ディーター・フランケ (メンシュケ校長)、ゲルト・グラッセ (ブラウシュトック)、バルバラ・デーベル (ハンヒェン)、ロルフ・ホッペ (ギヤング)、マルゴット・ブッセ (リタ)、ウルズラ・シュターク (ロージ・シュフト)、ホルスト・ヒーマー (リハルト)、オスタラ・ケルナー、クルト・ラデケ、エルトム=テ・シュミット、ベトラ・ティアバッハ、アンゲリカ・ヴィッチュ他

ストーリー：15歳のオットー・ヒンツは9学年の生徒、夢見る少年だ。どのような危険も乗り越え偉大な業績を上げることが出来ると思い込んでいる。実際には成績が悪くて落第するかも知れない。現状が不十分な知力によるものだとニッケル先生も思っていない。様々な関心を抱くオットーには夢と日常生活を上手く結び付けることが難しいのだ。メンシュケ校長がこの問題についての見解を示す—我々は如何にしてオットー君の関心を公正かつ有益に、学校生活と野鳥狩りという二つの領域を明確に分類することが出来るか？ オットーは答えに戸惑うが、少しは理解したようだ。この少年の状況がよく分かっているニッケル先生は彼を助けるために全力を尽すだろう。

解説：ライナー・ジーモンは好感の持てる想像力豊かな青少年向け映画を作ったが、「東ドイツにおける修正主義」「ドイツ社会民主党のイデオロギーに極めて近い」という映画連盟からの非難を甘受せざるを得なかった。

批評：この作品は映画業界に通例の演出手法を用いていない。ある程度重要な出来事の連続でオットー・ヒンツとニッケル先生の像を作り上げている。結末はオープンで全く分からない。注目に値する芸術性と多くの良く出来たシーンを備えた習作だ！それに手を加えて1本の映画が完成した。(1971年5月25日 ギュンター・ゾーベ、「ベルリン新聞」)

この映画が与えてくれる喜びは、「厳格さ」にも「緩やかさ」にも賛同している点にある。義務と成績、そして夢。もし上記の両方が無ければ少年の考えも行動も理解できないだろう。(…)ジーモン作品には徹底したこだわりが見受けられる—引き立つ映像を制作するために特別のストーリーは要らない。特異な出来事を強調する必要も無い。概ね同様に繰り返される日常生活の中から、状況と人物の本性が持つ特異性を浮き彫りにするような



『髭のない男たち』オットー・ヒンツ後のマンフレート・ベーム

映像を組み合わせ我々に提供している。更に、真に立派な人間味溢れる人物像とは何かを考え抜いた上で若い生徒を評価すること、若い世代の人々と理解し合うこと、世代間交流が如何に重要かを我々に問いかけ、また要請している。(1981年 ルドルフ・ユルシク、『DEFA-Spielfilm-Regisseure und ihre Kritiker [デアファ劇映画監督と批評家たち]』所収)

コメント：脚本家で当時デアファ社文芸部員であったインゲ・ヴステは、作家シュテファン・ハイムと結婚した後、インゲ・ヴステ=ハイムの名で物語の語り手としても知られていた。この映画の封切り日にはシュテファン・ハイムの他クリスタ・ヴォルフやヴォルフ・ビアマンも来賓として出席していたため、翌日ライナー・ジーモンは党指導部に呼び出され釈明を求められた。

DAS MÄRCHENSCHLOSS [メルヘンの城]

→付録Aを参照

MÄRKISCHE FORSCHUNGEN

『マルク地方の研究』*

監] ローラント・グレーフ **脚]** ローラント・グレーフ、クリステル・グレーフ **原]** ギュンター・デ・ブルイン作 同名物語 **撮]** ベーター・ブラント **音]** ギュンター・フィッシャー **美]** ディーター・アダム **衣]** バルバラ・ブラウマン **編]** モニカ・シンドラー **制]** フォルクマー・レーヴェック **制社]** グループ「ローター・クライス」 **長]** 2625m = 96分、カラー、brw、1981年制作 封切) 1982年4月21日 **場所]** カール=マルクス=シュタット、「シュタットハレ」 **出]** ヘルマン・バイヤー (ベッチュ)、クルト・ベーヴェ (メンツェル教授)、ユッタ・ヴァホヴィアク (ベッチュ夫人)、ディーター・フランケ (フリッツ)、トルーデ・ベッヒマン (アルヴィーネおばあちゃん)、エーベルハルト・エッジェ (プラトケ)、マリル・プーلمان (エッゲンフェルス夫人)、ミハエル・グヴィスデク (アルビン博士)、ジモーネ・フォン・ツグリニッキ (ウンフェアローレン夫人)、ホルスト・シュルツェ (レベティ)、ギュンター・シューベルト、クリスタ・レーザー、ジェッキ・シュヴァルツ、バルバラ・ディットウス、ヒルマー・パウマン、ドーリス・タールマー、ヨアヒム・トマシェフスキー、ヴァルター・レントルヒ、カール・ハインツ・コインスキ、ジーナ・フィードラー他

ストーリー：ベルリンの著名な大学教授ヴィンフリート・メンツェルはマルク地方出身の忘れられた詩人マックス・フォン・シュヴェーデノウを再発見する。旅の途中で村の教師ベッチュと出会い、この男も同じくシュヴェーデノウの足跡を調べていることを知る。更に彼は自分よりも多くの情報を持っていることに驚かされる。メンツェルはベッチュに共同研究を提案し、ベルリンで助手の口を仲介する。ベッチュは大喜び。しかし調査研究が進む中、メンツェルが考える「革命家シュヴェーデノウ」像に疑念を呈することになる。青年期には進歩的だったシュヴェーデノウが後に反動的なプロイセン政府の検閲官として一別の名前を使って働いていたのだ。自分の研究成果が危うくなるのを恐れたメンツェルは、それを無視するようベッチュに迫る。ベッチュは自説に固執する。そこでメンツェルは立場を利用してベッチュを追い出そうとする。しかしベッチュは決定的な証拠を夢中で探し続ける。

解説：ローラント・グレーフは小説を素材に辛辣な風刺映画を上手く作り上げた。どんな社会にも居そうな人物とその振る舞いを巡る悲喜劇だが、こうした話は東ドイツのドグマに

従うとあり得ないし、少なくとも社会主義にとっては「典型的」ではないだろう。野心的で愉快な作品が上映禁止の犠牲にならなかったのは、運が良かった稀なケースだ。

批評：映画は完璧に近い出来映えで物語を表現している。見事に調和した音声と雰囲気、軽妙なアイロニー、全体に肩ひじ張らず卓越している。難しい問題の論争ではなく、人々の生き方が描かれている。個性の強い俳優陣はぴったりの呼吸で、同時に緊張感溢れる演技を披露している。(1982年 クラウス・ヴィシュネフスキ、「映画とテレビ5」)



俳優たちの力量と魅力を信頼して出来上がった素晴らしい悲喜劇だ。ヘルマン・バイヤー演じる田舎の教師ベッチュは内気で世間知らずの変人で自意識過剰の一匹オオカミ。見栄えだけのペテンや流行りのシニシズムには染まらないが、異端者的妄想癖を感じさせる。(…)その一方で器用な主役クルト・ベーヴェはネガティブな主人公メンツェル教授の慢心と魅力を存分に表現している。彼の自惚れと嫌味な態度には嫌悪感を覚えるが、それと同時に観客は若干の同情を禁じ得ない。自画自賛の台座に安住するとは、一体この柔軟な頭脳の持ち主に何が起こったと言うのか！(1982年 レナーテ・ホラント=モーリッツ、「オイレンシュピーゲル 22」)

この物語の中に観客は、模範となる理想像に対して一切の疑念を許さない支配体制についての寓話を見る。メンツェルの同僚たちの姿に、上司の振る舞いに対する皮肉と諦めと卑屈と誰の目にも明らかな臆病の他に何もし得ない自分たち自身を見ている。(1994年 エルケ・シーバー、『Das zweite Leben der Filmstadt Babelsberg [映画都市バーベルスベルクの第二の生]』所収)

コメント：1982年の東ドイツ国民劇映画際において、当作品は東独映画クラブの「フィントリング (掘り出し物)」賞を受賞した。この「残念賞」は無視することの出来ない映画の功績を讃えるために特別に設けられた。ディーター・アダム、ヘルマン・バイヤー、クルト・ベーヴェの特別賞受賞に政治的意味は無く妥当だと見なされた。翌年、党幹部の多くが渋い顔を見せる中、この映画に東ドイツ批評家賞が授与された。

DER MAGDALENENBAUM 『マクダの樹』

【監】ライナー・ベールント 【脚】フリートホルト・パウアー、マンフレート・ホッケ 【原】アルミン・ミュラー作 同名書
【撮】ギュンター・ハウボルト、ディーター・ヒル 【音】ライナー・ブレデーマイヤー 【美】ハンスヨルク・ミル 【衣】
ウルズラ・シュトルンプ 【編】レナーテ・シェーファー 【制】ロルフ・マルティウス 【制社】グループ「ヨハニスタール」
【長】2300m＝84分、カラー、1988年制作 封切】1989年12月7日 【場所】ベルリン、「コロセウム」 【出】クリス
ティーネ・ショルン（マクダ）、クリスティアン・シュタイヤー（ランボル）、トーマス・レートリヒ/トーマス・シュテッヒャー
（フェリクス）、ダクマー・マンツェル（ロージー）、ヘルマン・シュテューヴェザント（グスタフ・シュトリーベル）、ドリス・ター
ルマー（ベルタ・シュトリーベル）、クラウス・ピオンテク（ブヒッツナー）、アネット・クルシュケ（ヒルデ・コンツァク）、
ヴェルナー・ディッセル（バンゼおじいちゃん）、ゲアハルト・ヘーデル、イルゼ・フォークト、ウルリヒ・フォス、アンド
レ・ヘンニッケ、ルッツ・シュナイダー他

ストーリー：船員のフェリクス・シュトリーベルは休暇中にある村を訪ね、建てられたばかりの「マザー・マクダ」の墓に参る。そこで幼少期の思い出が蘇る。一教区の修道女マクダの名に由来する1本のカシワの木。「マクダの樹」と呼ばれている、安穏と信頼のシンボル。ブルドーザーがこの木をなぎ倒そうと迫ってきた時、それを救ったのがマクダだ。彼女はこの村の魂。自らを顧みることなく他者に手を差し伸べる。短い期間フェリクスは彼女の家で暮らしたことがある。アルコール依存症の母ロージーが入院治療中であつた。その頃一人の画家ランボルも村に居た。うつ状態が続き、大都会の生活から逃れて来たのだ。

マクダと画家の間に恋が生まれた。フェリクスもマクダと共に暮らしていたので、修道女のマクダは家族の幸福のようなものを味わった。しかしロージーが退院すると、フェリクスは再び連れ戻された。ランボルが都会に戻る時、マクダを誘ったが一緒に行くことはなかった。自分自身を取り戻すために画家は彼女を必要としているだけだとマクダは考えた。残ったのは今もなおマクダを思い出させる1本の木のみ。

解説：若くして亡くなったポツダム市バーベルスベルクの映画テレビ大学卒業生の監督デビュー作は、技術的巧みさの証であり時代を超えて輝きを放つ。

批評：映画の冒頭では、セリフが出来る限り短く、映像は滞りがちにエピソードが連なり、クールな日常が散文的に描かれる。そしてマザー・マクダが現れ、地域の貧しい人々の中で人間味溢れる活動を始める。30分が過ぎた頃から物語はリズムよく動き出し、具体的な姿が見

えてくる。（1990年ベアトリス・ラングナー、「映画とテレビ2」）

全体として「何よりの長所だが」この寡黙な作品を特徴付けるのは、撮影のギュンター・ハウボルトが映した見事な映像であり、また作家アルミン・ミュラーのナイヴで超現実的な描写である。この絵画的表現が映画を構成し、詩的な高揚感を作り上げる。例えば、戦場に赴いたままの夫が収集し今もマクダが居間に掛けている沢山の古時計のように「永遠に続く、時を超えたシンボルだ。慌ただしい時代にこの作品はそぐわないかも知れ



クリスティーネ・ショルンとアンドレ・ヘンニッケ

ない。しかし価値観が激しく変わる時代にこそ、喧騒を免れた人生の重みを思い出させてくれるだろう。（1989年12月24日ハインツ・ケルステン、「日刊シュピーゲル」）

コメント：クリスティーネ・ショルンはドイツ劇場での初出演以来、ベルリンの演技派女優の一人として大活躍し、しばしば映画にも登場。とりわけロータル・ヴァルネ監督作品で好評を得た。

DIE MAHNUNG 『警告』

東独/ブルガリア/ソ連合作 【監】ファン・アントニオ・バルデム 【脚】リュウベン・スタネフ、ファン・アントニオ・バルデム、アッセン・トドロフ 【撮】プラメン・ヴァーゲンシュタイン 【音】キリル・チブルカ 【美】コンスタンティン・ルサコフ、ロータル・クーン、グリゴリ・パブレニコ 【衣】マリヤ・ソチローヴァ、ヴェルナー・ベルゲマン、ナーデシュダ・コヴァレンコ 【編】イリアナ・ミホヴァ 【制】ストラフコ・ヴァテフ、ヴェルナー・ランガー、タマラ・シレンコ 【長】4293m＝157分、カラー、1981/82年制作 封切】1982年10月22日（東独） 【場所】ライブチヒ、「キャピトル」 【共制】映画スタジオ「ボヤナ」、ソフィア/映画スタジオ「オレクサンドル・ドヴジェンコ」、キエフ 【露語題】PREUPRESHDENIJE 【出】ベティル・ギュロフ（ゲオルギ・ディミトロフ）、アッセン・ディミトロフ（マリヌス・ファン・デア・ルッペ）、ボリス・ルカノフ（ヴァシル・コロロフ）、ルッツ・リーマン（テールマン）、ヴィリ・シュラーデ（トルクラ）、クリストフ・カムケ（ホルツホイザー）、ウーヴェ・シュヴァイクフスキ（ゲーリング）、カール・ハインツ・オッペル（司会者）、ヒルマー・パウマン（ヘラー）、ネヴェーナ・コカノヴァ（リュバ・イヴォシエヴィチ）、エックハルト・ベッカー（ハインツ）、ペトラ・プロサイ（ルード）、ラルフ・J. ベトナー、クラウス・ペーター・ティーレ、ヨアヒム・トマシェフスキー、ゲオルク・レオポルト、ハインツ・シュレーダー、マンフレート・ツェツェ、ヘルタ・クノル、ルード・コメル他

ストーリー：1935年のモスクワでゲオルギ・ディミトロフは共産主義国際会議の席上、全ての進歩的勢力の統一戦線結成を呼びかける。カットバックを用い、また一部に歴史的ドキュメンタリー映像を加えて彼の人生を振り返る。1923年、ブルガリアにおける蜂起の敗北の後、人生の伴侶と別れて亡命する。非合法の生活。テールマン始め反ファシズム闘争を支える数多くの国の同志たちとの出会い。アムステルダムで開催される平和会議の準備。ベルリンでの国会議事堂放火事件では、法廷でファシズム政権の正体を世界中に暴露し勝利する。

解説：ディミトロフ生誕100年を記念するこの映画は、当初1932年の左派統一戦線結成を巡る戦いを中心に据える予定であつた。しかし、著名なスペイン人監督バルデムを迎えることになり、彼の希望で（デーファ作品『DER TEUFELSKREIS〔悪循環〕』『AMBOSS ODER HAMMER SEIN〔鉄槌になるか金づちか〕』の場合と同様に）ハイライトは国会議事堂放火事件法廷闘争に変更され、シナリオも相応に書き直された。

批評：有名なゲーリング対ディミトロフの論争を、バルデムはベルリン市内の住宅地の中庭を使ってアジ・プロの人形劇として表現した。しかし他ならぬこの独創的な思い付



『警告』ディミトロフ役のベティル・ギュロフ

きによって、監督が如何に自国のメンタリティにとらわれているかが明白になり、また異国の微細な文化環境に溶け込むことが如何に困難かを示した。ベルリンの建物の中庭とそこで生活する住民をよく知る者にとって、特に1933年当時の状況も合わせて考えると、これは全く奇妙なシーンだとしか言いようがない。(1980年 レナーテ・ホラント=モーリッツ、「オイレンシュピーゲル 31」)

バルデム程に腕のある監督になると特定の歴史的状況にとどまらず、それを越えて今日的なテーマ、例えば現代のファシズムに言及しようとする意図は明らかだ。単なる歴史として描くことはまずない。しかし歴史上の確実な事柄と今日の事象との弁証法はある種難しさを抱えているため、もっぱら伝記に頼って映像を仕上げることは解決しない。(…)映画のタイトルは言葉通り受け取るべきだ。教育的核心を見逃すことは出来ない。この辺に恐らく当作品の限界があるだろう。(1982年 ギュンター・アクデ、「フィルムシュピーゲル 24」)

出来上がったのは年代順に並べた飛び飛びの出来事を回想する物語で、歴史的な事実関係を熟知していない観客には理解が難しい。(…)実際に起こった出来事の再構成、リアルに描かれた虚構のシークエンス、そして異化効果を狙った特殊な演出という非常に異質な映像スタイルの間を揺れ動きながら一体化している。(…)正に不統一であるが通り一遍ではない独自の文体故、2時間半を超える映画であっても観客の関心を引き付けるのだ。(1982年 ハインツ・ケルステン、『So viele Träume [こんなに多くの夢]』より)

コメント: この映画は1982年に開催されたカルロヴィ・ヴァリ国際映画祭のオープニング記念として上映され、審査員特別賞を受賞した。

- スペインのファン・アントニオ・バルデム監督のドイツ人助監督ミヒャエル・カンは元々俳優で、ここではオランダ人通訳の役を演じている。

MAIBOWLE 『五月のパンチ』

監】 ギュンター・ライシュ **脚】** マリアンネ・リバラ、ゲアハルト・ヴァイゼ、イルゼ・ランゴッシュ **撮】** オットー・メルツ **音】** ヘルムート・ニア **美】** パウル・レーマン **衣】** ルイーゼ・シュミット **編】** ヒルデガルト・コンラート **制】** ハンス・マーヒ **長】** 2580m=94分、カラー **仮題】** *Familienfest mit Hindernissen* (邪魔の入った家族パーティ) 1959年制作 **封切】** 1959年10月5日 **場所】** ベルリン、「バビロン」 **出】** エーリヒ・フランツ (ヴィルヘルム・レーマン)、フリーデル・ノヴァク (アウグステ・レーマン)、アルベルト・ヘッテルレ (グスタフ・レーマン)、エーリカ・ドゥンケルマン (マリオン・レーマン)、クリステル・ボーデンシュタイン (ズーゼ・レーマン)、ハインツ・ドレーン (フランツ・レーマン)、エツケハルト・シャル (ギュンター・レーマン)、シュテファン・リゼウスキ (パウル・レーマン)、ホルスト・クーベ (アルベルト・レーマン)、エルンスト=ゲオルク・シュヴィル (厄介者)、フリッツ・ディーツ、カルラ・ルンケール、フーベルト・ヘルツケ、イヴォンヌ・メーリン、ヘルベルト・リヒター他

ストーリー: 化学工場の職長ヴィルヘルム・レーマンは65歳の誕生日を迎える。妻のアウグステは大家族の皆が参加できるようにお祝いのパーティを計画する。職場では彼に贈る「労働の旗」勲章の準備が進んでいる。例年通り「五月のパンチ」のパーティ担当は息子たち。息子フランツは全ての準備を整え、各地からやって来る兄弟がそれぞれの役割を果たすことを願っている。フランツ自身は農業協同組合の会合に出席しなければならない。しかし出席予定の家族の代わりに飛び込んでくるのは欠席の電報ばかり。急な仕事の都合で来ることが出来ない

いう。祝宴も家族の再会もお流れになりそうな気配だ。そしてヴィルヘルムの受賞式の模様が突然テレビの画面に現れると直ぐに皆が考え直し—父を誇りに思い—実家に戻ってくるのだった。

解説: 脚本はドイツ社会主義統一党第5回大会用に作られ、ドイツ民主共和国建国10周年記念日の封切り上映はまたと無い機会であった。しかし制作者たちは東ドイツの化学産業基本計画「宣伝映画」に、未だ完全に社会主義国になり得ていない現状に対する辛辣な皮肉をこっそり紛れ込ませた—現実を偽るテレビ放送があり、国家機構に組み込まれた自分勝手な夫が居る。

批評: カラフルで光輝く映像の中で大勢の優れた俳優たちが活躍している。(…)陽気で明るい騒動の裏に彼らの名演技とギュンター・ライシュの演出の素晴らしさがある。年配労働者を祝福する職場と「彼自身が築いた」家庭。この二つの祭りを一つに合体させた物語の中に、より進歩した人間と労働の社会主義的共同社会が息づいている。(1959年10月20日 H. U. E., 「ベルリン新聞」)

若い監督ギュンター・ライシュと有能な撮影監督オットー・メルツは、時々はしゃぎ過ぎ(比喩的にも言葉通りにも)だが、「五月のパンチ」のレシピは当を得ている。既に企画されている続編について、友人として一言アドバイスをしたい。砂糖はもう少し節約して! (1959年 ローゼマリー・レハーン、「週間ポスト 50」)

コメント: レーマン家の物語は1年後の喜劇作品『SILVESTERPUNSCH (大晦日のパンチ)』に引き継がれた。

- 当時未だ素人であったユッタ・ホフマンは主役エーリヒ・フランツに花束を贈呈し、それがきっかけで華々しい女優人生をスタートさせた。



『5月のパンチ』アルベルト・ヘッテルレ、エーリカ・ドゥンケルマン、クリステル・ボーデンシュタイン

MAIHIME

→ *DIE TÄNZERIN* 『舞姫』を参照

MAMA, ICH LEBE 『ママ、僕は生きてるよ』*

【監】コンラート・ヴォルフ 【脚】ヴォルフガング・コールハーゼ、ヴォルフガング・ベック、ギンター・クライン、クラウス・ヴィシュネフスキ、ディーター・ヴォルフ 【撮】ヴェルナー・ベルクマン 【音】ライナー・ベーム 【美】アルフレート・ヒルシュマイアー 【衣】ヴェルナー・ベルクマン 【編】エフェリン・カーロウ 【制】ヘルベルト・エーラー 【制社】グループ「バーベルスベルク」 【長】2820m＝103分、カラー、brw、1976年制作 【封切】1977年2月24日 【場所】ベルリン、「インターナショナル」 【出】ペーター・ブラーガー（ベッカー）、ウーヴェ・ツェルベ（パンコニン）、エーベルハルト・キルヒベルク（コラレフスキ）、デトレフ・ギース（クシュケ）、ドナタス・パニオニス（マウリス）、マルガリータ・テレホヴァ（スヴェトラナ）、ミハイル・ヴァスコフ（コーリヤ）、イェフゲニー・キンディノフ（グルンスキ）、イヴァン・ラピコフ（大将）、マルティン・トレッタウ（コーゼル）、パヴェル・ザイツェフ、ヴィクトル・ウラルスキ、ウーヴェ・シュタインブルッフ、ミハエル・ヴァツケ、ノルベルト・クリスティアン他

ストーリー：ソビエト連邦の捕虜収容所。4人の若いドイツ兵が軍服を着替え、これまでの敵側陣営に加わり戦争の早期終結のために戦う。ソ連兵の軍服を身にに着け、列車で指導員と共に前線に向かう。車中の兵士たちは彼ら4人がドイツ人であることに程なく気付く。4人にとって新しいアイデンティティを身に付けるのは容易ではない。宿営では他の兵士たちから裏切り者と言われる。ソ連軍兵士の態度も様々だ。疑い深い者も居れば仲間と見なす者も居る。前線に到着すると、ドイツ陣営の裏側に回る作戦に参加するか否か問われる。一人は不参加。他の3人はパルチザン部隊と共に戦うため森に侵入する。そこで突然、撃墜された戦闘機のドイツ兵たちに遭遇する。3人は彼らに銃を向けることが出来ない。その時に指導員コーリヤが命を落とす。彼の死に3人は衝撃を受ける。この間、居残った一人とソ連軍の女性無線通信士は互いに好意を持ち始める。彼はロシア人たちから非難されるが、彼女は彼の味方になる。その後、彼自身も作戦に参加する決意を固める。

解説：コンラート・ヴォルフが自らの体験に即して描いた『*ICH WAR NEUNZEHN*（僕は19歳だった）』（1968）のテーマに関連させ、今回はナチス・ドイツ国防軍の若い兵士の物語。捕虜として敵軍に付いて戦うと同時に母国のために戦った兵士たちだ。元々ヴォルフガング・コールハーゼが放送劇として脚本を書いていたが、同じ素材に戦争時の証人たちや東ドイツ映画省の元大臣ギンター・クラインとの対話を加筆して1本の映画に発展させた。

批評：前後の繋がり是非常に正確で調子よく進行する。しかし出会いと問いと答え、更に新しい問いを通して生じるドラマ的展開が見えない。意図的に作り出すべき緊張感が



『ママ、僕は生きてるよ』
デトレフ・ギースとドナタス・パニオニス

欠如している。（…）監督は若い俳優たちが各々個性ある演技が出来るように動きの少ないシーンを用意し、ヴェルナー・ベルクマンのカメラと共に几帳面にそっと見つめる。4人の行動の魅力溢れるドキュメンタリー的な映像が出来上がった。大声を出すことも、芝居がかった感傷的な場面も出てこない。（1977年 ペーター・アーレンス、「ヴェルトビューネ8」）

歴史的に遠く離れた今日の観客に対して何らかの教訓を与える意図は無く、個人的な記憶を思い起こすかのような作品だ。そのため観客にとっては骨の折れる感情移入が求められる。とりわけ4人の若い戦争捕虜が如何なる理由で敵側に回って戦うようになったのか、その背景や動機は余り知らされない—それが作品の弱点と言えるだろう。（1977年4月10日 ハインツ・ケルステン、「フランクフルター・レントシャウ」）

コールハーゼの多くの作品と同様、言葉の繊細さとコミュニケーション能力に与える影響に焦点が絞られている。今回は彼がよく知るベルリンを離れ、二つの異なる言語が交わる空間におけるコミュニケーションの問題に取り組む。更に異なる文化が及ぼす影響と意思疎通の妨げになる可能性もテーマになっている。（2016年1月1日 ジム・モートン、「東ドイツ映画ブログ」）

コメント：この映画はソ連の撮影所ソヴィンフィルムとレンフィルムの協力で出来た。にもかかわらずソ連での配給に問題が生じた。ソ連の女性士官とドイツ兵士の恋愛に対して、ソ連の駐東独大使ピョートル・アブラシモフが異議を唱えたからだ。最終的にコンラート・ヴォルフは若干譲歩し、最小限の短縮に同意した。

-女性の主人公スヴェトラナを演じたマルガリータ・テレホヴァは、既にアンドレイ・タルコフスキーの『鏡』（1975）に出演し名が知られていたが、その後初めての米ソ合作映画『*THE BLUE BIRD*（青い鳥）』（1976）でエリザベス・テイラーやジェーン・フォンダと共演することになった。

関連の出版：ヴォルフガング・コールハーゼ著 脚本「ママ、僕は生きてるよ」、1977年「映画とテレビ5」所収

MAN SPIELT NICHT MIT DER LIEBE

『愛は遊びじゃない』

【監】ハンス・デッペ 【脚】カール・ゲオルク・キュルプ 【原】グスタフ・カンペンドク作 戯曲『Die glücklichste Ehe der Welt（世界一幸せな結婚）』 【撮】エッケハルト・キュラト 【美】ヴィリ・A.ヘルマン 【音】フランツ・グローテ 【編】ヨハンナ・マイゼル 【制】マックス・コスロフスキ 1949年制作 【制社】CCC映画アルトゥル・ブラウナー、西ベルリン 【長】2500m＝90分、モノクロ 【封切】1949年11月23日（西独、シヨルヒト映画配給）、1950年3月31日（東独、デーファ映画配給） 【出】リル・ダゴファー（フロレンティーネ）、アルブレヒト・シェーンハルス（エドゥアルト）、ブルーニ・レーベル（フリーデル）、ハウル・クリンガー（ヴァルター）、ペトラ・ペーター（ヴァニヤ）、ゲオルク・トマラ（ペーター）、エーテル・レシュケ、ホルスト・ゲンツェン、アレクサ・フォン・ボレムスキー、エルゼ・レーファル、エーヴァルト・ヴェンク他

ストーリー：将来義理の息子になる男性が、表向きは模範的な義理の両親の仲が危うくなっていることに気付く。その後、様々な誤解や嫉妬が解け、皆が仲直りする。（f.b.h.）

解説：この娯楽映画の制作にアルトゥル・ブラウナーはデーファ社のアルトホフ撮影所を使用、隣接するバーベルスベルク公園でも撮影を行った。その見返りにデーファ映画配給は、

有利な条件の下で東ドイツでの劇場公開を実現することが出来た。

批評：軽量級の娯楽映画。楽しく比較的心地よい仕上がり。(『Lexikon des Internationalen Films [インターナショナル映画事典]』)

コメント：主演のブルーニ・レーベル、パウル・クリンガー、ペトラ・ペータースは1940年代にもデーファ映画の主演を引き受けている。脚本家カール・ゲオルク・キュルプは西ドイツでの仕事の後、1960年代前半にデーファ社が製作したテレビ用映画のシナリオ(『FLITTERWOCHEN OHNE EHEMANN [夫のいないハネムーン]』[1961]等)を書いている。

DER MANN, DER NACH DER OMA KAM

『おばあちゃんの後に来た男』*

監】ローラント・エーメ **脚】**マウリツィ・ヤノフスキ、ロータル・クッシュェ、ヴァイリ・ブリュックナー **原】**レナーテ・ホラント=モーリッツ作 **物語**『Graffunda räumt auf (グラーフンダが片付ける)』 **撮】**ヴォルフガング・ブラウマン **音】**ゲルト・ナチンスキ **美】**ハンス・ポッペ **衣】**マリア・ヴェルツィヒ **編】**ヒルデガルト・コンラート=ネラー **制】**ジークフリート・カピツケ **制社】**グループ「ヨハニスタール」 **長】**2530m=93分、カラー、brw、1971年制作 **封切】**1972年2月10日 **場所】**ベルリン、「インターナショナル」 **出】**ヴァインフリート・グラットツェダー(エルヴィン・グラーフンダ)、ロルフ・ヘアリヒト(ギュンター・ピーゾルト)、マリタ・ベーム(ゲートルン・ピーゾルト)、カトリン・マルティン(ガビ・ピーゾルト)、ロルフ・クールバッハ(ダニー・ピーゾルト) ヘルベルト・ケーファー(コッチュマン氏)、マリアンネ・ヴェンシャー(コッチュマン夫人)、ハーラルト・ヴァンデル(ハンス=ヨアヒム)、イルゼ・フォークト(ピーゾルトおばあちゃん)、マルゴット・ブッセ(マリアンネ)、フレート・デルマーレ(ケッペ氏)、アグネス・クラウス(ケッペ夫人)、アンゲラ・ブルンナー、ヴォルフガング・グレーゼ、カルメン=マーヤ・アントーニ、ヨッヘン・トーマス、オットー・シュタルク、イルゼ・マイブリット、ゼンタ・ボナッカー、フリッツ・デヒョー他 **歌】**マンフレート・クルーク

ストーリー：ギュンターとゲートルンのピーゾルト夫妻は二人とも多忙な仕事人間。彼はTVコメディアンで彼女は俳優だ。家事と子供の世話はおばあちゃんに任せている。しかし人生を思う存分に楽しむ年配の彼女は再び結婚することになる。婚礼前夜の大騒ぎの中、ピーゾルト夫妻は割られた大量の食器の後片付けだけでなく、もう一つの難問に頭を抱え込む。これからこの家の家事は一体誰が引き受けてくれるのか? 家の中の混乱状態がほぼ限界の收拾不可能に近付いた時点で、遂に人手募集の新聞広告を出す。若い男性が一人やって来た時はびっくり仰天。見かけが良く、優しく、インテリ風で、名前はグラーフンダ。全ての家事を見事にこなし、隣人のおしゃべりも上手だ。誰もそこに隠された意図があると気付かない。ギュンターは彼がゲートルンの愛人ではないかと疑心暗鬼になる。大きな謎の答え—グラーフンダは女性解放をテーマに学位論文を書くために、実践を通して様々な経験を集めているのだ。この間結婚して間もなく父親になる彼にとって、このテーマは自分自身の個人的な関心事でもあった。

解説：雑誌「オイレンシュピーゲル」で映画評論を担当する著名な風刺作家レナーテ・ホラント=モーリッツによる短編小説の映画化で、デーファ作品の中で最も評判の高い喜劇の一つ(封切り後の2週間で25万の観客動員を記録)。巧みに描かれた効果的なシーンと並んで当作品の娯楽性を生み出したのは、今日の東ドイツで働く女性たちの解放に対する軽い皮肉である(映画ではアーティスト夫婦の家族という例外的な設定)。

批評：この快活な喜劇作品は、冗談と遊び、沢山の思い付き、ギャグ、駄洒落、馬鹿騒ぎ、たわい無い言動、そしてシチュエーションの面白さで演出されている。ローラント・エーメ監督と俳優陣にとって重要なのは、今日の問題に関して明朗な娯楽を提供することだろう。ヴァインフリート・グラットツェダー演ずる「伯爵^{グラフ}フンダ」は少し真面目過ぎて素っ気ない。少し愛想が足りなくて自信過剰で偉そうだ。グラフフンダには、むしろ無造作な若者らしさが似合っているかも知れない。(1972年 レナーテ・ザイデル、「フィルムシュピーゲル4」)

ローラント・エーメの演出。独創性を求め過ぎて脱線することはなく、リズムに乗って山場を作り、登場人物の個性を上手く引き出し、面白いシチュエーションは納得のいくまで演じさせる(調理用電気器具を使ったシーン)。賢明な配役。俳優たちは観客の期待を呼び起こすと共にその期待を満たそうと努め、また満たすことが出来る(ヘアリヒトやケーファー見たさに映画館に出かける観客も多い)。そして彼らはエピソードの中に新しい発見をする喜びを感じている(カルメン=マーヤ・アントーニ)。皮肉に対する感性(夢のシーン、家具運搬業者)、繰り返しによって「高貴な」シチュエーション喜劇が生まれる。気負いの無い器用な演技だ。(1972年 ペーター・アーレンス、「ヴェルトビューネ9」)

コメント：当時の有名人が大勢出演し「素顔」を見せている。人気のテレビ番組『Rumpelkammer(がらくた部屋)』の主ヴァイリ・シュヴァーベ、デーファ映画のインディアン首長ゴイコ・ミティチ、TVディレクターのフーベルト・ヘルツケ、魚料理人ルドルフ・クロボト、スポーツコメンテーターのハインツ=フロリアン・エルテル。脚本の共著者ロータル・クッシュェは家具運搬人として、また25年後には有名なテレビ映画の女優になったデボラ・カウフマンは、幼児アンとして母親アンゲラ・ブルンナーが押す乳母車に座っている。

MANN GEGEN MANN 『男対男』

監】クルト・メーツィヒ **脚】**クルト・メーツィヒ、アンネ・ブフォイファー **原】**クルト・ビーザルスキ作 **小説**『Das Duell (決闘)』 **撮】**エーリヒ・グスコ **音】**ゲアハルト・ヴォールゲムート **美】**ヨッヘン・ケラー **衣】**バルバラ・ピトラ **編】**ウルズラ・ルツキ **制】**フォルクマー・レーヴェック **制社】**グループ「ベルリン」 **長】**2878m=106



『おばあちゃんの後に来た男』
マリタ・ベーム、ヴァインフリート・グラットツェダー、
カルメン=マーヤ・アントーニと子役ロルフ・クールバッハ



グラットツェダーとロルフ・ヘアリヒト

分、カラー、brw、1975年制作 封切】1976年1月22日 場所】ベルリン、「インターナショナル」出】レギマンタス・アドマイティス（ローベルト・ニーマン）、カーリン・シュレーダー（アンナ）、クラウス＝ペーター・ティール（エドゥアルト・トルンテン）、ミヒャエル・グヴィスデク（ミヒャエル・メーア）、カーリン・グレゴレク（ヘルガ）、ヴェルナー・ディッセル（釣り人）、マルティン・フレルヒンガー（老人）、ペーター・パウゼ（ジャガイモ生産者）、ユーリィ・クラマー（通訳）、ロルフ・マルティン＝クルッケンベルク（隣人）、アンネ・ヴォルナー、パルバラ・パッハマン、マルガ・ハイデン、マリア・ペーゼンダー、ペーター・ヘルツェル他

ストーリー：二人の男が戦争から戻ってくる。彼らの会話から突然二人が同じ女性と結婚していることが判明する。ミヒャエルが彼女と結婚した時、ローベルトは既に戦死した事になっていたのだ。男たちは、どちらが彼女の元に戻るか偶然に任すことに決めた。地雷が仕掛けられた地帯を駆け抜ける二人。生き残ったのはローベルト。しかし彼女はローベルトを受け入れない。彼女はミヒャエルを待っていたのだ。ローベルトは去り、二人の子供と暮らすシングルマザーのアンナと知り合う。新たな恋愛だが、ローベルトは決断できない。最初の妻に対する失望が未だ尾を引いている。ローベルトは仕事場でエドゥアルトと出会う。彼もローベルトと同じ地雷撤去に携わっている。エドゥアルトもまたアンナに好意を抱く。アンナがエドゥアルトの子を宿した時、再び決断を迫られるローベルト。彼は今回アンナに決断を委ねる。

解説：戦後しばらく時間が過ぎた頃の出来事を小劇場風に新たなスタイルで纏めたクルト・メーツィヒの作品。好評を博したが、彼のデーファ社最後の映画で多くの観客動員を得ることは出来なかった。

批評：象徴的なものを過剰に用いなかったことはクルト・メーツィヒと適材適所の俳優陣と（…）撮影のアーリヒ・グスコによる作品にとって、プラスとなっている。分かり易くリアルなシーン。パートナーたちの関係の始まりと展開は、時にリズムを乱すこともあるが、ゆったりと描かれている。時折り象徴的なもの、つまり情熱の開花を示す樹木や太陽が前面に出てくる。（1976年 ペーター・アーレンス、「ヴェルトビューネ 19」）

メーツィヒは言葉の多用を避けて物語をバラード調に仕上げ、大切な事柄に集中している。映像は明解でしばしばメタファーが用いられている。（…）ゲアハルト・ヴォールゲムートによるドラマ性の濃厚な音楽に支えられ一部のシーンが意味深長になり、全体として一種の緊張感に満ちた不自然さが残る。（1976年 ハイッツ・ケルステン、『So viele Träume [こんなに多くの夢]』より）

コメント：1976年のカルロヴィ・ヴァリ国際映画祭でカーリン・シュレーダーが最優秀



『男対男』レギマンタス・アドマイティス（右）とカーリン・シュレーダー



アドマイティスとクラウス＝ペーター・ティール

女優賞を受賞。

DER MANN MIT DEM OBJEKTIV 『レンズを持つ男』*

監】フランク・フォーゲル 脚】パウル・ヴィーンズ、ヴィリ・ブリュックナー 撮】ホルスト・ハルト 音】ゲルト・ナチンスキ 美】ハンス・ポッペ 衣】マリアンネ・シュミット 編】クリスタ・ヴェルニッケ 制】ジークフリート・ニュルンベルガー 制社】グループ「ハインリヒ・グライフ」長】2205m＝81分、モノクロ 仮題】Der Mann mit dem GGO (GGOを持つ男) 1960/61年制作 封切】1961年10月1日 場所】ベルリン、「コロセウム」出】ロルフ・ルートヴィヒ（オーエス/マルティン・マルテン）、クリスティーネ・ラスツァル（マーヤ・マイヤー）、ヘルガ・ラブダ（アニータ）、ミカエラ・クライスラー（ベックヒェン）、オットー・シュタルク（オイゲン）、エーリク・S. クライン（ベンノ）、エーリヒ・フランツ（シュミット）、ザビーネ・タールバッハ（企業内放送スタッフ）、ハインツ・シューベルト（小売店主）、マリアンネ・ヴェンシャー（店員）、マイカ・ヨーゼフ（ヘルタ）、ゲルトラウト・クライシヒ、モニカ・ヒルデブラント、ヴェルナー・ディッセル、ハンス・ルツェ、アヒム・ヴォルフ他

ストーリー：ロケット操縦士のオーエスは、技術的故障のため2222年から抜け出し1960年に迷い込む。アニータの目前で、彼は湖の底から浮上する—真っ裸だ。もちろん彼女はオーエスの話す内容は全く信じないが、少なくとも衣類を調達できるように自分のバスローブを貸す。彼の滞在期間は24時間に限定されているという。この間—彼自身にも他の人々にも—びっくりする事が次々に発生する。オーエスに所持金が全く無いこと等は驚くに値しない。何故か有名な俳優マルテンと間違われ、信用を得る。しかし彼の持つGGO（感情と思考のレンズ）を使うと人間の裏面をのぞくことが出来、他人への干渉を抑えられなくなる。何度も大騒ぎを起こした後、ようやく時刻表示版の故障が修復される。そしてオーエスの着ていた衣服だけが後に残る。1960年の人々は未だGGOを使いこなすことが出来ないという確信を得て、オーエスは未来に戻っていく。

解説：アイデアに込められた可能性が全て実現した訳ではないが楽しいコメディが出来上がり、ロルフ・ルートヴィヒは喜劇俳優としての名声を得た。彼とミカエラ・クライスラーが歌う曲『君の耳には小人が居る』はヒットした。人は実際に何を考えているか、「魔法の機械」を使って知ることが出来るというアイデアは、1965年にエーゴン・ギュ



『レンズを持つ男』主演ロルフ・ルートヴィヒとミカエラ・クライスラー



ルートヴィヒ（中央）

ンターの『WENN DU GROß BIST, LIEBER ADAM (君が大人になったら、アダム)』(1965)において新たに、そしてより徹底して取り上げられた。しかし、こちらは即座に上映禁止となった。

批評：素晴らしいアイデアにも関わらず、残念ながら制作者たちは社会批判に値するものを放棄している。レンズを持った男が異議申し立てしようとしたこと、彼を驚かせた楽しませたことは、一般に「ティル・オイレンシュピーゲル」で大人しく逆らわない人々として充分知られている。「くずチーズ」だ。(…)何れにせよ、この映画が皮肉を込めた距離感で根本的着想を演技に表している限り、間違いなく大成功と言えるだろう。しかし一人二役という内容が加わり、寓話全体から見ると「別の星から来た男」以上のこじつけ感がある。(1961年 カール・アンドリーセン、「ヴェルトビューネ 44」)

エンドロールを見ると、非現実的な物語にも関わらず確実なことが一つある。つまり21世紀の我々は共産主義社会に生きるということ。その時に笑うか泣くか、今は未だ分からない。もちろん、ここでは面白おかしく誇張されているが、今日より幸福な社会がやって来るという強く揺るぎない無邪気な信念が映画全体から伝わってくる。(1994年 エーリカ・リヒター、『Das zweite Leben der Filmstadt Babelsberg [映画都市バーベルスベルクの第二の生]』所収)

コメント：両親が映画制作に関わっていた20歳のミカエラ・クライスラーは、当時既に15年の「俳優歴」を持っていた。つまり彼女は1947年から1950年まで、幾つものデアファ映画に子役として出演していたのだ。

DER MANN MIT DEM RING IM OHR

『耳にリングをはめた男』

監 ヨアヒム・ハスラー **脚** ヴォルフガング・エーベリング、アンドレアス・シャイネルト **原** ベルンハルト・ゼーガー作 小説『Der Harmonikaspieler (ハーモニカ奏者)』 **撮** ハンス・ハインリヒ **音** カール=エルンスト・ザッセ **美** ハインツ・レスケ **衣** ウルズラ・ヴォルフ **編** イローナ・ティール **制** ウーヴェ・クリメク **制社** グループ「ヨハニスター」 **長** 2362m=87分、カラー、brw、1983年制作 **封切** 1984年4月6日 **場所** ヘルトブルク/ヒルトブルクハウゼン郡、「フォルクスハウス」 **出** ウラジーミル・ガイタン (ティルマン・ルーテンシュナイダー)、



ルート・コメレルとウラジーミル・ガイタン

オアナ・ベレア (ヴァンダ)、ドミニカ・ベレア (ヴァンダの母)、ハイトルン・パーデルヴィッツ (リアーネ・ゲーベ)、イェルク・パンクニン (ユルゲン・ルーカス)、ロッテ・レーピンガー (マルタ・ライゼリング)、カーリン・デューヴェル (エラ・ルーカス)、エーリク・S. クライン (ノイゲバウアー)、ハイデマリー・ヴェンツェル (クナックブッシュ夫人)、ルドルフ・ウルリヒ (クナックブッシュ氏)、ヘルムート・シャイバー、ヴァインフリート・ワーグナー、ブルーノ・カルステン、ハリー・ピーチュ、ルート・コメレル、ヨハンナ・クラス、デトレフ・ギース、ルッツ・シュナイダー、リタ・フェルトマイアー、ペーター・カリシュ他

ストーリー：大工のティルマン・ルーテン

シュナイダーは長年あちこち旅をしてきた。1932年に30歳の彼は外国人の妻と共に故郷マルク・ブランデンブルクの村に帰ってくる。家を建て世帯を持つ。程なく新たに制定された人種法の犠牲になる。家は放火され、妻と子供は炎の中で亡くなる。彼自身は強制収容所に送られる。解放された後、彼は再び故郷の村に戻る。新しい家庭を築き、新しい家を建てた。移住者たちと共に協同組合を作り、独自の方法で土地改革を進めた。ティルマンは借金の増大で窮地に陥り、刑務所に行き着く。借金返済のために自宅を手放す。出所して再び故郷の村を目指す。

解説：ヨアヒム・ハスラーはティルマン・ルーテンシュナイダーを主役に貧しく粗削りな人物を意図的に作り上げた。そのため主人公は分かり易く理想化されている。しかし、四半世紀に亘る長い期間に起こる多くの出来事は詳細に語られていない。

批評：彼(ハスラー)は進歩的思想の持ち主で、アイデアを実現するために相応しい俳優たちを探し出し、彼らを見合った環境と場所に配置して物語を組み立てる。そして現実主義を滑稽なまでに追求し続ける。(1984年 U. E. ベトガー、「映画とテレビ 5」)

ヨアヒム・ハスラー監督はドイツの歴史の苦々しい経験を短く一つに纏めた。原作の広範囲に亘る出来事を1時間半の映画に仕上げた。『耳にリングをはめた男』は1932年から1950年代に至るまで、数々の運命的な衝撃と闘いにおいて自分自身が強く勝っていることを証明した。1945年強制収容所への移送の途中に不屈の活力で脱走。そして偶然都合よく現れた赤軍兵士によって、彼は妻の死に責任があるナチ突撃隊の指導者に対する復讐を思いとどまる。短期間の拘留—今回はソ連軍の保護—の後、「不屈の男」は再び新しい女性に巡り合う。(1985年7月8日 ハインツ・ケルステン、「日刊シュピーゲル」)

コメント：ハーモニカはブルガリア人ソリストのルボミール・プレヴァが演奏した。

MARIBELLA, DAS MÄDCHEN AUF DEM TITELBLATT

『マリベラ、表紙に出た少女』

→ *DAS MÄDCHEN AUF DEM TITELBLATT* 『表紙に出た少女』(付録C)を参照

MAX UND SIEBENEINHALB JUNGEN

『マックスと7.5人の少年たち』

児童映画 **監** エーゴン・シュレーゲル **脚** マンフレート・フライターク、ヨアヒム・ネストラ、タマラ・トランベ **撮** ヴォルフガング・ブラウマン **音** ユルゲン・エッケ **美** ゲオルク・クランツ **衣** マリアンネ・シュミット **編** イローナ・ティール **制** ヴェルナー・ランガー **制社** グループ「ベルリン」 **長** 2415m=89分、カラー、brw、1979/80年制作 **封切** 1980年12月4日 **場所** ベルリン、「インターナショナル」 **出** ペーター・シュトゥルム (マックス)、カトリン・マルティン (ツァーン嬢、教師)、ヴォルフガング・ヴァインクラー (コルネリアの父)、ハイデ・キップ (デザイナー)、ヴォルフガング・デーラー (トラック運転手)、ヴォルフガング・グレーゼ (ドイツ軍曹長)、ヴァルトラウト・クラム (教区内シスター)、マリー=アンネ・フリーゲル (コルネリアの母)、カルメン=マヤー・アントーニ (郵便局員)、ハンス=ゲルト・ゾネンブルク (警官) <<子役>>ディルク・ボームス、マティアス・グリュエネス、インゴルフ・ヴィルヘルト、ハイケ・ノイマン、ローラント・ハンマーマン、マイ=ブリット・フェヒナー他

ストーリー：年老いた反ファシズム主義者マックス・シュトリッカーは、8年生クラスの生徒たちにブーヘンヴァルト研修旅行の準備としてスライドを使った講演を行う。子供たちはふざけて講演を邪魔し、台無しにする。更に旅行中にも同様のいたづらをする計画を立てる。ルッケンヴァルデで一つのグループが列車を降りる — 少年7名と少女1名。それに気付いたマックスも降車する。驚いた子供たちにマックスは賭けを提案 — 彼らが自力でワイマールまで行くこと。最初に一人ずつ5マルクを渡し、集合は翌日の夕方。子供たちはこの挑戦を受けて立つ。何人かは一緒に、他の子供たちは単独で行動する。ガキ大将でほら吹き「キング」は無能力を自ら暴露し、謙虚な「ソラマメ」はこの非常事態に論理性と協調性を発揮する。単独行動のフレディは無賃乗車と万引きをして警察に補導される。最後は皆少し賢くなり、マックスに対して尊敬の念を抱く。マックスが賭けを言い出した時、如何に大きなリスクを覚悟したのか、子供たちも理解が出来たようだ。

解説：今日まで東ドイツで作られた反ファシズム青少年映画とは異なる、この作品の根本理念の一つが社会主義的「代父」だ。共感し協力するのではなく対抗する人物のこと。そのため、ある意味で冒険的なこの作品は、特に国民教育の関係者から不評を買った。しかし主役のペーター・シュトゥルム自身が強制収容所の地獄を経験し、厳しさと深い理解力は連関していることを熟知していたのは幸いであった。

批評：アイデアは脚本家タマラ・トランペが出したもので、限らない称賛に値する。たとえ映画の出来映えが芸術的視点で望むべくレベルに達していないとしても、その輝きに非の打ち所がないことは明らかだ。(1980年12月7日 マルギット・フォス、「ベルリン放送」)

シュレーゲルは珍しい状況を背景に演出しているが、大騒ぎの中にも主要な意図が消えてしまうことはない。簡単ではないバランスが上手く取れている。(1980年12月8日 ヘンリク・ゴルトベルク、「新しいドイツ」)

もちろん、映画が事実在即して描くシーンの中には、よく見ると非現実的な所が若干見えてくる。子供たちが会おう大人は皆優しく親切で物分かりが良い。つまり東ドイツは好ましい「日曜日の顔」だけを見せている。ヴォルフガング・ブラウマンのカメラを通すと汚れた工業地帯の風景も晴れ晴れとして美しい。(1981年1月18日 ハイנטツ・ケルステン、「日刊シュピーゲル」)

注目すべきは (...) マックス・シュトリッカーという人物だ。栄光に輝く共産主義の闘士でもなく、独善的でも厳格でもない。むしろ自分自身に懐疑的で格式張らない大人だ。彼は最後

まで一貫して子供たちの立場に立つ。学校や警察等の「統治権力」や礼儀正しく言われたことに素直に従う子供たちに対抗する場に居る。フィナーレには和解も無く、記念の集合写真も無い。(1996年『Zwischen Marx und Muck [マルクスとムックの間に]』)

コメント：1981年、この映画はゲーラの東ドイツ子供映画祭で児童審査員栄誉賞とグランプリを受賞。また同年にウィーン近郊ノイジードルで開催された国際青少年大会で児童審査員賞第2位と観客審査員賞第1位を授与された。



『マックスと7.5人の少年たち』
ペーター・シュトゥルムとホルスト・バアケ

MAZURKA DER LIEBE 『愛のマズルカ』

監] ハンス・ミュラー **脚]** A. アルトゥル・クーネルト、ハンス・ヨアヒム・ヴァルシュタイン **原]** カール・ミレッカー 作オペレッタ『乞食学生』 **撮]** カール・プリンツナー **音]** カール・ミレッカー **協]** ゲルト・ナチンスキ **美]** エーリヒ・ツァンダー **衣]** ヴァルター・シュルツェ=ミッテンドルフ **編]** ヘルガ・エムリヒ **制]** ハリー・シュトゥット **長]** 2375m=87分、カラー、Tovi、標サ) **仮題]** *Der Bettelstudent* (乞食学生) 1956年制作 封切) 1957年5月1日 **場所]** ベルリン、「コロセウム」 **出]** アルベルト・ガルベ (司政長官オレンドルフ)、ベルト・フォルテル (ジーマン)、エーベルハルト・クルーク (ヤン)、カタリーナ・マイベルク (プロニスラヴァ)、ズザンネ・クリスティアン (ラウラ)、ヤルミラ・クシーロヴァー (コヴァルスカ伯爵夫人)、クルト・ミュールハルト (ヘンリヒ)、チャールズ・H. フォークト (オヌフリー)、オットー・E. シュテューブラー (エントリヒ)、ミヒャエル・ギュンター (フォン・ロッホウ)、ハンス・ヴェーレル、ヘルベルト・ケーファー、マクシミリアン・ラルゼン、ヨッヘン・ディーステルマン、ヨー・ショルン他

ストーリー：18世紀初頭クラカウを舞台にしたカール・ミレッカー作『乞食学生』の映画化。始まりは学生ジーマンと自由解放の闘士ヤンの出会い — コヴァルスカ伯爵家の馬車の中。ジーマンはギターを抱え、学費を稼ぐために国中を旅している。ヤンはザクセン占領軍から追われる身だ。二人はコヴァルスカ家の二人の娘ラウラとプロニスラヴァに一目惚れ。アウグスト強健王が地方長官に任命した貴族オレンドルフの祝宴に彼女たちと一緒に出かける。オレンドルフがラウラに近付き過ぎた時、彼女の母は扇子で彼に一撃を与える。それを見たジーマンとヤンはオレンドルフを嘲笑したため監禁される。コヴァルスカ夫人への復讐として、オレンドルフは貧しい学生ジーマンを侯爵に変装させラウラと結婚させようと目論む。しかしヤンとジーマンはオレンドルフの不意を突き、政治犯の助けを借りて彼を失脚させる。

解説：新規開発されたトータルビジョンによる最初の作品はオペレッタの映画化。原作と比較して映画ではストーリーがより濃密になり、その結果音楽にとって好ましくない影響が時々出ている。

批評：これ (新しい方式、f.b.h.) は特に大画面スクリーンにとって素晴らしいものだ。(…) 大勢の登場人物が舞踏に興じる場面の多いオペレッタを素材に選んだのは (...) 納得できる。(…) デーファ社が物語に付着した数十年来の埃を可能な限り取り除き、「ポーランド国内の面倒な事情」の描写を背後に押しやり、そして正当にもポーランド人の占領者ザクセン貴族たちに対する国民的怒りを前面に押し出した。(1957年5月5日 H. U. E., 「ベルリン新聞」)

映画の題名 (...) が示すように、脚本家 A. A. クーネルト、音楽家ゲルト・ナチンスキ、そして監督のハンス・ミュラーは確かにミレッカーのオペレッタから基本的構想とメロディを借用した。しかし映画では物語を一層濃密にし、メロディも今日風に変えた。恐らくミレッカーも芸術の天国で腹を立ててはいないだろう。何故なら音楽、舞踏、躍動、リズムがカール・プリンツナーの映像構成によっても一つの纏まった完成品として凝集されているから。(1957年5月7日 ギュンター・シュターン



『愛のマズルカ』
オレンドルフ役アルベルト・ガルベ



ラウラ役ズザンネ・クリスティアン

ケ、「ユンゲ・ヴェルト」)

コメント:伯爵夫人コヴァルスカ役には当初マリカ・レックの名が上がっていたが、交渉の末このセンセーショナルな配役は実現しなかった。

-ズザンネ・クリスティアンの芸名でクリスティアーネ=ズザンネ・ハルランはデーファ映画では唯一の出演を引き受けた。彼女は後に英国の監督スタンリー・キューブリックと結婚し、それからはクリスティアーネ・キューブリックの名を使った。

DIE MEERE RUFEN 『海が呼んでいる』

監] エドゥアルト・クバート **脚]** ヤン・ペーターゼン、マリールイーゼ・シュタインハウアー **撮]** エミール・シューネマン **音]** ホルスト・ハンス・シーバー **美]** アルトゥル・ギュンター **衣]** ゲアハルト・カダッツ **編]** ルート・シュライバー **制]** リヒャルト・ブラント **長]** 2355m=86分、モノクロ、1951年制作 **封切]** 1951年12月14日 **場所]** ベルリン、「バビロン」/デーファ映画館「カスターニエンアレー」 **出]** ハンス・クレーリング(エルンスト・ラインハルト)、ケーテ・アルヴィング(イェダ・ラインハルト)、エーファマリア・バート(ギーゼラ・ラインハルト)、ヘルムート・アーナー(ヴァルター・ラインハルト)、ヘルベルト・リヒター(フランツ・ネルテ)、マクダレーナ・フォン・ヌスバウム(エミ・ネルテ)、ヴィオラ・レックリース(インゲ・ネルテ)、ハンス=ヨアヒム・マルテンス(ハインツ・ネルテ)、ヨハネス・シュミット(ハインリヒ・シュテューバー)、マルティン・フレルヒンガー(クルト・シェラー)、ハンス・マイコフスキ、ヴィリナルロッホ、グスタフ・ピュティアー、フリードリヒ・ジーマース、ギュンター・バリエ、アルフレート・マーク他

ストーリー: 海岸沿いの小さな町ヴォルコウで、戦後新たに漁業会社が設立される。エルンスト・ラインハルトも求人に応募する。エルンストは娘を呼び戻そうと西ドイツへ出かけた際、米国の秘密警察に脅される。応募調査書に事実を書かなかったこと、またヒトラーの国家社会主義ドイツ労働党の党員であったことが発覚したからだ。そして秘密警察の指示に従うよう求められる。しかし彼は正しいと思うことをするだけだと決心し、新しい会社の人事部に向かう。

解説: アルトゥル・ポール、ヴォルフガング・シュライフ、ファルク・ハルナック、ヴォルフガング・ラングホフらが監督を辞退したので、経験豊かな制作主任のエドゥアルト・クバートがこの題材で監督デビューを果たした。映画では故郷を離れて難民となった二人の男を描く。一人は西ドイツに移住し、もう一人は東ドイツで社会主義国家の建設に貢献する。更に

アデナウアーの仲間に向けたサボタージュ事件が阻止され未遂に終わるというエピソードも追加された。また、この映画の宣伝や広報とは逆に本作では扇動的な描き方はされず、東西ドイツ共通の関心事として平和国家の建設が強調されている。

引用: ハインツはアデナウアーなんか居なければ良いと思っている。彼は魚を獲り生活したいだけ。彼にとってザスニッツコンビナートは政治のバロメーターなのだ。新しい積み荷の一つ一つが東ドイツの労働者にとって豊かさと平和と幸福に向かう前進だ。



ハンス・クレーリングとヘルムート・アーナー

(1951年「プロGRESS映画グラフ」)

批評: 熟練の監督が脚本をしっかり読み込んでいたなら、海岸や海に重点を置くべきだと分かったはずだ。残念なことにエドゥアルト・クバート監督はバルト海よりもスタジオ撮影の方が快適だったのだろう。そもそもバルト海への関心も、ベルリン郊外のヴァンゼー湖と見間違え程に酷似しているからだったのか。こうして海は生気の無い舞台となり、多少気負った感のある題名が期待させたような「共演者」にはなれなかった。(…)登場人物も役柄を超えた展開には至らなかった。何故なら演出が多くの問題(東西ドイツ、戦後復興、サボタージュ、警戒心等)を抱え、本質と非本質の区別をまるで忘れているからだ。この作品は必然的に政治的観点を見失っている。(1952年LUX、「ヴェルトビューネ2」)



『海が呼んでいる』エーファマリア・バート(左中)

コメント: 当時22歳の主演エーファマリア・バート(1929~2023)は、30年以上ベルリンのマクシム・ゴリキー劇場の専属女優であった。彼女は映画やテレビでも様々なジャンルの個性的な役を演じていた。

MEIN BLAUER VOGEL FLIEGT

『僕の青い鳥は飛ぶ』

児童映画 **監]** ツェリーノ・ブライヴァイス **脚]** ギーゼラ・カラウ、セリーノ・ブライヴァイス、アンネ・ブフォイファー **原]** ギーゼラ・カラウ作 児童書『Der gute Stern des Janusz K. (ヤヌシュ K. の幸運な星)』 **撮]** ギュンター・ヨイテ **音]** アンジェイ・コジンスキー **美]** ペーター・ヴィルデ **衣]** レギーナ・フィアテル **編]** エーリカ・レームプー **制]** ディーター・ドルマイアー **制社]** グループ「ベルリン」 **長]** 2120m=78分、カラー、brw、1974/75年制作 **封切]** 1975年10月23日 **場所]** ベルリン、「インターナショナル」 **出]** マルティン・トレッタウ(ローベルト)、ボグダン・イズデブスキ(ヤヌシュ)、アルノー・ヴィツニエフスキ(マルセル)、インジフ・ヤンダ(ホンツァ)、レオン・ニェムチック(マリアンおじさん)、フランク・シェンク(シュミット)、ヴォルフガング・グレーゼ(デューベル指揮官)、イェルク・バンクニン(しわがれ声の男)、ヴィルフリート・プッヘル(土木監督)、ホルム・ヘニング・フライアー(ナチ親衛隊員)、ヨッヘン・ディーステルマン、ボード・シュミット、ヴァルトラウト・クラム、クラウス・ニーツ、ピョトル・ソト他

ストーリー: 強制収容所に移送されたポーランド人の子供たちが体験した実際の出来事に基づく物語。ドイツ人の監督囚人ローベルトは共産主義者で、自分の地位を利用して囚人たちに手を差し伸べ、子供たちを破滅から救い出そうとする。そして子供たちにレンガ積み工の実習を受けさせ、自分の作業チームに受け入れる。しかし子供たちの信頼を得ることは容易ではない。特に賢くて強情なヤヌシュは、連帯の意味を理解しドイツ人ローベルトに対する偏見を克服するまで時間がかかる。ローベルトが独房に入れられた時、ヤヌシュは子供たちからパンを集めローベルトに差し入れする。

解説: この映画は子供たちや青少年にナチス・ドイツの歴史を知ってもらう試みだ。作劇



『僕の青い鳥は飛ぶ』
強制収容所内のフランク・シエンク (中央)

法に不十分な点は見られるが、啓蒙作用を一つの目標にしている、今日においてもなお有効である。

批評：演出は明らかに揺れている。一方で詩情豊かな流れをストーリーに取り込もうとする意図があり、他方で出来事を直に表現するシーンがある。この二つの間で決断できず、登場人物の個性を掘り下げて描くことに集中できていない。残念ながらスケッチ程度に終わっている。とりわけマルティン・トレッタウ演じるローベルトとワルシャワの高校生ボグダン・イズデブスキが演じるポーランド青年ヤヌシュには個性が無い。二人の態度と行動は具体的な物語の展開の中でしばしば象徴的意味を持つだけで、特に青少年層の観客には理解が難しいだろう。(1975年 ヨアヒム・ギーラ、「週間ポスト 44」)

トレッタウの演技のお陰でローベルトは映画の中心人物になっている。ポーランドの少年たちが独房に入れられたドイツ人の友人ローベルトに密かにパンを渡した後、彼の運命はどうなるのか、観客は是非知りたいだろう。しかし映画はそこで突然終わってしまい、不満が残る。(1975年 レナーテ・ホラント=モーリッツ、「オイレンシュピーゲル 48」)

コメント：ブーヘンヴァルト強制収容所で建設作業チームの監守だったドイツ人共産主義者ローベルト・ジーヴェルト (1887～1973) の体験がこの映画の素材になっている。彼は戦争を生き延び、若い世代の人々が過去の歴史を知り評価できるように力を尽くした。戦後初のザクセン・アンハルト州内務大臣を務め、土地改革を敢行し功績を認められた。

MEIN LIEBER ROBINSON 『私の愛するロビンソン』

監】ローラント・グレーフ **脚】**クラウス・ポッヘ、クリステル・グレーフ **撮】**ローラント・グレーフ、ユルゲン・レンツ **音】**ゲアハルト・ローゼンフェルト **美】**ペーター・ヴィルデ **衣】**カトリン・ヨンゼン **編】**モニカ・シンドラー **制】**エーリヒ・アルブレヒト **制社】**グループ「ローター・クライス」 **長】**2140m=78分、モノクロ/カラー **仮題】***Die Sache mit dem S.* (Sとの事) / *Sohn und Vater* (父と息子) 1970年制作 封切) 1971年3月2日 **場所】**ベルリン、「インターナショナル」 **出】**ヤン・ベレスカ (ペーター・グルナー)、ガブリエレ・ジューモン (カーリン)、アルフレート・ミュラー (グルナーの父)、ディーター・フランケ (アダム・コヴァルスキ)、カーリン・グレゴレク (バルバラ)、ケーテ・ライヒェル (カーリンの家主)、ロータル・タレルキン (アンテナ)、マルガ・レガール (病気の老女)、ギュンター・ヴォルフ (マルティン)、ミハエル・パン (オートバイ運転者)、エーリカ・シュティスカ、フランク・ミヒェリス、フレート・ルートヴィヒ、ルート・コメレル、クリスティアーネ・ランツケ他

ストーリー：ロビンソンは19歳の想像力豊かな青年。がっしりした体格の同僚コヴァルスキとチームを組んで救急車運転手として働き、大学入学の準備を進めている。個人的には夢想家で空想の世界に生きている。女子学生カーリンとの出会いも夢物語の一つで、ある日彼女が救急用担架で運ばれて来たのがきっかけだ。二人は恋に落ち、カーリンは妊娠し、ロビンソンは

彼女のために家庭を築こうと思う。しかし彼は自分の家族や子供時代に別れを告げることが出来ない。そして両親の家と彼自身の「家庭」を行ったり来たりしている。この間、子供は誕生。遂にカーリンは彼を夢の世界から引きずり出す。ずっと彼女の傍に居ること、また結婚して二人の関係を公けにすることを要求する。

解説：撮影のローラント・グレーフは、この日常生活と人物描写を軸にした作品で監督デビューを果たした。主な配役に素人を抜擢し、実際の現場を舞台にドキュメンタリー風の演出に徹した。

批評：カーリンとロビンソンの関係は—監督の言葉を信じるなら—申し分なく堅実で、またそのような関係の本質としてロビンソンの成長の原動力でもあるべきなのだが、ここで描かれた限りでは明らかに作劇上の欠陥と見なされる。感じられるのは待ち続けるか避けて通ることで、結び付きや寄り添いが見られない。何といても未だ十分に成熟していない若者同士の関係に摩擦も起きず、互いに補い合う様子も無い。恐らく脚本の段階で既に意図されていたのだろうが、二人の素人俳優の起用で一層色濃くなった。(1971年 マルリス・ティコ、「フィルムシュピーゲル 6」)

撮影技術と映像構成に関するグレーフの非凡な才能は、この作品においても完璧だ。この若き巨匠は汚れた市電の窓にさえ詩情とベルリン独特の雰囲気を読み取ることが出来る。彼はカメラに酔い、撮った映像に夢中になり、結果として映画のドラマ性には余り関心が向いていない。(1971年 レナーテ・ホラント=モーリッツ、「オイレンシュピーゲル 14」)

若い人の無意識な振る舞いが奇妙な状況の中で浮き彫りにされ、父親 (アルフレート・ミュ



『私の愛するロビンソン』 ヤン・ベレスカとカーリン・グレゴレク



『私の愛するロビンソン』
ベレスカ (右) とアルフレート・ミュラー

ラー) や年上の同僚 (ディーター・フランケ) との関係では、慣習と道徳上の相違、新しい合意の可能性といったテーマも取り上げられている。(1994年 クラウス・ヴィシュネフスキ、『Das zweite Leben der Filmstadt Babelsberg [映画都市バーベルスベルクの第二の生]』所収)
意見: 撮影は楽しくなかった。同じシーンを何度も繰り返すのは気に入らなかった。パートナー役の俳優にも政治的に重要なシーンにも興味は湧かなかった。(…) 軍隊に居た時も「俳優業」で得なことは無かった。その反対だ。僕の前科はもちろん知れ渡っていた。

た。その上「俳優」だなんて。僕は有名だった。だからと言って軍隊で良い訳じゃない。ある時、政治局将校の士官が「君の言うことは全く信用できない。俳優だからね」と言った。偶然東ドイツの文化政策と出会った初めての瞬間だ。当時の僕にとって、あの難解な言葉の裏には「芸術家」に対する幹部たちの自信の無さが隠れていたのだ。(1993年 ヤン・ベレスカ、『DEFA NOVA – nach wie vor? [新生デーファー足跡の検証]』所収)

コメント: 主演のヤン・ベレスカは既にヘルマン・チョッへの『LEBEN ZU ZWEIT (二人の生活)』(1968) で主演を演じたが、この間反対派として目立つようになっていたため、ローラント・グレーフは彼の主演を実現するのに腐心した。この後ヤン・ベレスカは幾つかの映画で小さな役や中位の脇役で登場し、1970年代にはバーベルスベルクで演出を学んだ。しかし結局デーファ社でも東ドイツのテレビでも監督の仕事を見つけることは出来なかった。

MEIN VATER ALFONS 『僕の父さんアルフォンス』

児童映画 監】 ハンス・クラッツェルト 脚】 ギュンター・エーベルト、ハンス・クラッツェルト、バルバラ・ロガル原】 ギュンター・エーベルト作 同名物語 撮】 ギュンター・ハイマン 音】 カール=エルンスト・ザッセ 美】 マルレーネ・ヴィルマン 衣】 エーヴァルト・フォルヒナー 編】 リタ・ヒラー 制】 ジークフリート・カピツケ 制社】 グループ「バーベルスベルク」 長】 1997m=73分、カラー、1980年制作 封切】 1981年7月14日 場所】 ノイブランデンブルク、「フィルムパラスト」 出】 ユルゲン・フート (アルフォンス・マルクグラーフ)、ヤン・キング・ラウシュス (エルンスト・マルクグラーフ)、ベトラ・ヒンツェ (マルゴット・マルクグラーフ)、フレート・デルマーレ (カーマニア)、ヴォルフガング・グレーゼ (発明家キーゼルマイヤー)、ギュンター・シュューベルト (宿屋主人ツァストロウ)、カレン・シュレーター (ズザンネ・マルクグラーフ)、アンドレアス・ヒルシュフェルト (ヴァイルフリート)、ウルズラ・シュターク (エリーゼ・ピアバッハ)、マルガ・レガール (ダリアの婦人)、ジェッキ・シュヴァルツ、ヴィオラ・シュヴァイツァー、ホルスト・ベエック、シュテフィー・シュピラ、ヨハネス・ヴィーケ他

ストーリー: 10歳のエルンストは父親アルフォンスと自転車ツアーをしたいと思うが、母親は金婚式に列席するため家族皆でザイフェルツグリューンに出かけると言う。結局母親は譲歩し、もし二人が時間通りに着くと約束するなら自転車旅行を認めることに。エルンストとアルフォンスはメクレンブルクからエルツ山地に向かって出発する。旅の途中で多くの困難と冒険

に遭遇。何故ならアルフォンスは、困っている人を見ると放っておかず必ず助けるからだ。例えばスカイダイビングの女性が花嫁姿で木に引っ掛かった時も救出を手伝う。約束の時間は迫ってくるが、父と子はザイフェルツグリューンから未だ遠くに居る。しかし、彼ら自身も色々な人たちの世話になり、最後は飛行機に乗って祝宴に間に合う。

解説: 児童映画の専門家ハンス・クラッツェルトは、この素材で手堅く纏めた現代劇の新作を完成させた。

批評: 映画の進行につれ滑稽さが増幅する数々の行動は、話の落ちも無く広がり、退屈さが蔓延する。残念だが、父と子の関係を深く掘り下げて描くことが出来ていない。父の倫理規範に大した説得力が無いにも関わらず、息子エルンストは引っ張られて付いていください。ユルゲン・フートが演じる父親アルフォンスは、他人を助けようとする時、心ならずも間抜けなお人好しに映るのは恐らくシナリオのせいだろう。(1981年7月9日 e.o., 「ノイエ・ツァイト」)

母と娘と彼女のフィアンセは重要な脇役なのだが、確かな印象を残す程に描写が出来ていない。個々の冒険的出会いでは次から次に新しい人物が登場し、その都度事件に影響を与えるかのように振る舞うが、結局のところ苦勞して繰り広げる道中物語の目立たない水玉模様で終わっている。(1981年8月13日 エーレントラウト・ノヴォトニー、「Mein Vater Alfons [僕の父さんアルフォンス]」)

コメント: 『LIEBE MIT SECHZEHN (16歳の愛)』(1974) で主演したペーター・リンゼは、今回スポーツ・技術協会 GST の教員として重要な役を演じている。同様に『SIEBEN SOMMERSPROSSEN (七つのそばかす)』(1978) の主演カレン・シュレーターもズザンネ・マルクグラーフ役で客演している。



『僕の父さんアルフォンス』
ユルゲン・フートとヤン・キング・ラウシュス



フート、ラウシュス、ギュンター・シュューベルト

MEIN VATER IST EIN DIEB

『父さんは泥棒』

児童映画 監】ディートマー・ホーホムート 脚】ディートマー・ホーホムート、イェルク=ミヒャエル・ケルブル、マンフレート・フリース 原】バルバラ・キュール作 児童書『Til und der Körnerdieb (ティルと穀物泥棒)』 撮】ユルゲン・レンツ 音】ライナー・ベーム 美】ディーター・アダム 衣】ドールト・グリュンデル 編】カーリン・クッシュェ 制】ギンター・シュヴァーク 制社】グループ「ベルリン」 長】2069m=76分、カラー、1982/83年制作 封切】1983年8月5日 場所】ベルリン、「コロセウム」 出】アンドレアス・クルーク (ティル)、ウーテ・ノアック (ヴィーゼル)、ラルス・ボーネット (巻き毛)、マティアス・メルツ (ブルーノ)、エーベルハルト・キルヒベルク (ハンネス・ブルマイスター)、ロルフ・ホッペ (テムラー)、カール・ハインツ・コインスキ (パウル)、トーマス・ティエメ (バンデロウ)、ヘルムート・シュトラスブルガー (鑑定人)、ラインハルト・シュトラウベ (コンバイン運転手) 他

ストーリー：10歳のティルと友達二人は土砂降りに遭い農家の納屋に逃げ込む。そこで見知らぬ男が穀物を盗むのに気付く。彼らは探偵ごっこをすることに決めた。程なくティルには犯人が明らかになる。彼の父だ。それを知ったティルの心は痛む。この事実を友達の前では秘密にし、話題を逸らす。全てを父と話したいと思うが切り出せない。父は収穫の最中で大忙しだ。とうとうティルは荷馬車に乗るパウルに打ち明ける。しかし既に友達には誰が泥棒かを突き止めた。事件は公けになる。

解説：モスクワの全ロシア映画大学 WGIK 演出科を卒業したディートマー・ホーホムートは、このデビュー作で倫理問題を中心に置き、若い観客たちを対象に発信する。しかし映画に緊張感の無いのが残念に思われる。

批評：物語には象徴的な統一性が余り見られない。更に人物の描き方とモチーフに関して作劇上の弱さがある。そのため観客側に（これは児童向け映画だ！）ある種の戸惑いが生じ、全体の印象もぼやけている。俳優の演出にも感じ取れるものはほとんど無い。（…）このデビュー作品で最も印象的なのは農村風景だ。（…）ディートマー・ホーホムートは映像表現が上手だ。（1983年8月11日 U. E. ベトガー、「ノイエ・ツァイト」）

ユルゲン・レンツのカメラは、長い静かなカットでメクレンブルクの風景を労働環境としても描いている。未解決の終わり方は投げかけられた問いに安易な答えを出していない。農業労働組合内部においても、また父と息子の間でも。答えは若い観客に委ねられた。（1983年ハ

インツ・ケルステン、『So viele Träume [こんなに多くの夢]』より）

仕事上では責任感の強い父。一実は彼が盗みを働くのだが—を巡る興味深い葛藤は確かにじっくり観察されている。しかし、この二つ目の次元でもってさえ、話を延々と続けさせることは出来ない。（…）しばしば子供たちは風景の中でぎこちなく立っている。どうすれば良いのか分からず大人の口調を真似ながら大袈裟に話す。要約すると、一人の少年が80分間話そうと試みる。何故そんなに時間が必要なのか、この映画は説明できない。



カール・ハインツ・コインスキとアンドレアス・クルーク

（1996年『Zwischen Marx und Muck [マルクスとムックの間に]』）

コメント：ハンネスを演じたエーベルハルト・キルヒベルクは、コンラート・ヴォルフ監督の『MAMA, ICH LEBE (ママ、僕は生きてるよ)』（1977）で主役の一人として有名になった。

MEINE FRAU INGE UND MEINE FRAU SCHMIDT

『妻インゲと妻シュミット』

監】ローラント・エーメ 脚】ヨアヒム・プレーマー、ローラント・エーメ、ディーター・ヴォルフ 原】ヨアヒム・プレーマー作 同名放送劇 撮】ヴェルナー・ベルクマン 音】ギンター・フィッシャー 美】ゲオルク・クランツ 衣】インゲ・キストナー 編】ヘルガ・エムリヒ 制】ドロテア・ヒルデブランド 制社】グループ「バーベルスベルク」 長】2343m=86分、カラー、brw、1983/84年制作 封切】1985年2月21日 場所】ベルリン、「コスモス」 出】ヴァルター・プラテ (カール・レーマン)、カリン・ザース (妻ブリギッテ・シュミット)、ヴィオラ・シュヴァイツァー (妻インゲ・レーマン)、カール=ヘルマン・リッセ (上司ヴァルブルク)、ウルズラ・ヴェルナー (マリア)、ルッツ・シュテュックラート (同僚ハンス・バイヤー)、エレン・ヘルヴィヒ (バイヤー夫人)、ヴェルナー・ゴードマン (地区専属警官)、ラインハルト・シュトラウベ (マヌエル・シュミット)、ヴィリ・シュラーデ (アルトゥル)、アルニム・ミュールシュテット (オットー)、エーリカ・シュティスカ (オットー夫人)、マルグリット・シュトラスブルガー、ラルス・ユング、ロルフ・ルートヴィヒ、クリスタ・レーザー、ルドルフ・ウルヒ、ギンター・ドレッシャー、バルバラ・ディットウス、ペーター・ヴェルツ他

ストーリー：幸せに結婚生活を過ごすカール・レーマンはある日、同僚の独身女性シュミッ



『妻インゲと妻シュミット』レーマン役ヴァルター・プラテと妻シュミット役カリン・ザース



『妻は音楽家』
インゲ役ヴィオラ・シュヴァイツァー、プラテ、ザース

トから驚くべき頼み事を聞かされる。彼女はぜひ子供が欲しいという。レーマンは協力するにやぶさかでない。レーマン夫人インゲとシュミットは同じ頃に子供を産む。二人の女性は互いに相手を思いやる心の持ち主なのである約束をする。そしてカール・レーマンを二人で共有することになった。1週間はインゲが、次の1週間はシュミットが彼を引き受けるという交代制。お堅い人、びっくり仰天した人、妬ましく思う人、そんな人たちがもし居なければ、この合意は上手くいくはずだったのだが。確かに肯定的に受け止めた人

も居るには居た。シュミットという名の別の男性は、自由になったインゲの1週間に興味を示し、別のレーマンという男性同僚は1週間自由なシュミットに好意を抱く。その結果、程なくカール・レーマンははじき出され、あるウエートレスの家に逃避する羽目になる。

解説：皮肉の効いたお伽話風に纏めた作品。ブレーマーとエーメは社会主義社会における男女関係の新しい在り方の物語を作った。この面白おかしい映画に関する東ドイツにおける批評は些末な粗探しに終始している。

批評：ローラント・エーメは(…)ありとあらゆる映画原則に(…)抵触している。人間的社会的に不十分なところを皮肉も交えて当てこする、そんな喜劇映画を作りたかったのだろうか。それともメルヘン調のグロテスクな作品か。あるいは、かつてフリードリヒ・エンゲルスが疑問視したという婚姻制度の問題点を遊び半分に取り上げているのか。恐らく、これらの全てから少しずつ、と言ったところか。エーメ自身、それぞれの形式が「筋が通っている」そして「面白い」ことを前提に、ジャンル混合形式の信奉者だと認めているのだ。(1985年 レナーテ・ホラント=モーリッツ、「オイレンシュピーゲル 15」)

人物描写の心理的深化が不十分だと非難があるようだ。しかし、意図的に思考モデルとして出来事を構成する立場を考慮すると、非難は的外している。映画に「猥雑な匂い」があれば良かったのだが、という声があるが、これもまた制作者の意図を理解できていない。制作者は映画で、正にそのような匂いから解放された男女関係を描こうとしたのだ。(…)デーファ映画社の愉快的な映画の専門家ローラント・エーメは、今回(極めてドイツ的な)真面目な喜劇を作り、極めて多面的な人間的調和の美しいユートピアを銀幕に描くモラリストであることを示した。(1985年4月23日 ハイッツ・ケルステン、「フランクフルター・レントシャウ」)

コメント：番組紹介雑誌FFの読者によって、ヴァルター・プラテは1984年テレビの人気者トップに選ばれた。1990年代には第2ドイツテレビZDFの『Der Landarzt (地方の医者)』の主役の一人として全ドイツで人気を博した。

MEINE FRAU MACHT MUSIK 『妻は音楽家』*

【監】ハンス・ハインリヒ 【脚】ヴァルター・ニクラウス、マリールイーゼ・シュタインハウアー 【撮】オイゲン・クラウゲ

【音】ゲルト・ナチンスキ 【美】オスカー・ピーチュ衣 【ゲアハルト・カダッツ 編】フリーデル・ヴェルザント 【ヴェルナー・ダウ 長】250m=92分、カラー 【仮題】Solo zu viert (4人でソロ) 1957年制作 封切】1958年4月3日 【場所】ベルリン、「パピロン」 【出】ローレ・フリッシュ 【歌】ギッタ・リント(ゲルダ・ワーグナー)、ギュンター・ジーモン(グストル・ワーグナー)、マリー・デルシャフト(ズージ・レティヒ)、アリーセ・プリル(エーファ・レティヒ)、ヘルベルト・キーパー(フリッツ・レティヒ)、エフェリン・キュンネケ(デージー)、アレクサンダー・ヘガルト(ファビアーニ)、ルー・ザイツ(イェッテ)、クルト・シュミットヒェン(アルトゥル・パプケ)、パウル・ハイデマン(舞台監督ニールゼン)、マリオ・レルヒ、アルフレート・マーク、ヴァルター・E. フース、インゲボルク・ナス、ハイッツ・シューベルト他



『妻は音楽家』
ギョンター・ジーモン、
エフェリン・キュンネケ、ヴァルター・E. フース

ストーリー：二人の子供を持つ母ゲルダ・ワーグナーは10年間の幸せな結婚生活の後、プロの歌手としてキャリアを積むことを急に思い付く。彼女は音楽学校出身で今も美しい声の持ち主だ。ファンが群がるイタリア人歌手ファビアーニと偶然出会い、昔の夢を思い出す。そして夢の実現に全てを賭ける — デパートでレコード売り場の主任をしている夫グストルは腹立たしい思い。ファビアーニに対する嫉妬心からグストルは酒に溺れる。酔っぱらったグストルは、既にゲルダが有名になっている劇場へ向かう。彼の「出演」は大騒ぎを引き起こし、ようやく気が付くグストル。妻にとって大事なのはファビアーニではなく音楽なのだ。

解説：現代的なデーファ音楽映画を求める声は長い間聞かれなかったが遂に実現した。反響は半々に分かれている。娯楽的な要素が成功しているにも関わらず、東ドイツの現状が充分に反映されていないと言う批評家も居る。また大勢の西側俳優の出演も不必要だという意見もある。

批評：歓迎すべき映画。大衆芸術分野の友人たちは概ね満足している。非常に多彩な内容だ — 確かに今日この分野の芸術固有の弱点もあるが、同時に無邪気な娯楽として楽しむことが出来る。(1958年 カール=エドゥアルト・フォン・シュニッツラー、「フィルムシュピーゲル 9」)

レビュー映画は我々の社会主義文化政策において例外的な地位が与えられてしかるべきだと監督も脚本家たちも考えているようだが、決してそうではない！(…)社会主義リアリズムの方法は映画レビューの基盤も作っているということを忘れてるように、私には思える。(1958年 カール・シンスキー、「ドイツ映画芸術 5」)

コメント：実直なギュンター・ジーモンを誘惑する罪深き女を演じる西ドイツの俳優エフェリン・キュンネケは、「リアス」ダンス音楽部門のジークフリート・ヴェーゲナーに彼女自身にピッタリの新作2曲を書いてもらい、それを撮影の際に歌っている。ヴェーゲナーの正体が最悪の「階級の敵」(当時「リアス」は階級の敵と見られていた)代弁者だと明らかになると、キュンネケは新たにナチンスキが作曲した2曲を歌い、元の映像に差し替えた。

- ハンス・クレーリングとエルゼ・コーレンは当時カップルであったが、帽子を買う客とその妻を演じている。

- 作品の原案を書いたのは特にナレーターとして有名な俳優で監督のヴァルター・ニクラウス

(1925 年生まれ) である。

MEINE FREUNDIN SYBILLE

『僕の恋人ジビレ』

【監】ヴォルフガング・ルーデラー 【脚】ルディ・シュトラール、ヴォルフガング・ルーデラー、アンネ・ブフォイファー
【原】ルディ・シュトラール作 同名物語のモチーフ 【撮】ロルフ・ゾーレ 【音】ヴォルフラム・ハイキング 【美】アルフレート・ドロスデク 【衣】バルバラ・ミュラー 【編】イルゼ・ペーターズ 【制】マンフレート・レンガー 制社】グループ「ベルリン」 【長】2282m=84 分、カラー、cine、1966/67 年制作 封切】1967 年 6 月 24 日 【場所】ベルリン=グリューナウ、野外劇場 【出】ロルフ・ヘアリヒト (フルティヒ)、ハンス=ミヒャエル・シュミット (ロニー)、エフェリン・オポチンスキ (ジビレ)、エーファ=マリア・ハーゲン (ヘレナ)、ヘルガ・ゲーリング (精神科医)、アルトゥル・ヨップ (ジビレの父)、マリアンネ・ペーレンス (ジビレの母)、ハンス=ヨアヒム・プライル (チーフ添乗員)、ヴェルナー・リールク (添乗員)、ロルフ・リッペルガー (マイア=博士)、クラウス・ベルガット、エーリカ・シュティスカ、ハンナ・リーガー、ヴィリ・ナルロッホ、フーベルト・ヘルツケ他

ストーリー：黒海ツアーの最中、添乗員助手のフルティヒは旅行グループの要望を — 奇妙なものも含め — 満たすために大忙しだ。多種多様な旅行客の一人 17 歳のジビレ。彼女はギターを弾く魅力的なロニーに一目惚れ。だが彼の関心は別の女性に向いている。ストレスを抱えたフルティヒの些細とは言えない落ち度のため、若いジビレとロニーはズフミの港で乗船時間に遅れる。二人は別々にあるいは一緒に、楽しくあるいは機嫌を損ねて、美しいカフカス地方を通り、陸路で次の寄港地ソチを目指して旅をする。添乗員の職務を真剣に受け止めるフルティヒも二人の後を追って移動。途中で数々の冒険を経験するが、親切なソ連市民の助けもあり日程通りにソチの港に辿り着く。

解説：中身の余り濃くないこの喜劇は、ロルフ・ヘアリヒトの滑稽な演技と当時一般に未だ手の届かなかった観光地ブルガリアの広大な風景のお陰で、観客の期待に込めている。

批評：このたわい無い娯楽のために、ストーブの傍が好きで不精の人を引っ張り出す必要は無いだろう。暑い夏の夜に向いている映画だ。高尚な芸術の代わりに人気者ヘアリヒトとプライルのドタバタ喜劇、そして美しいグルジアの風景を映す数百メートルの文化映画が楽しめる。

(1967 年 レナーテ・ホラント=モーリッツ、「オイレンシュピーゲル 27」)

ロルフ・ヘアリヒトがお人好しの添乗員を演じ、当然のように観客が大爆笑する。しかし主役のヘアリヒトが登場しない場面では面白味が無い。(1967 年 マンフレート・ハイディッケ、「フィルムシュピーゲル 15」)

コメント：ヴォルフガング・ルーデラー監督自身、この映画の中の映画監督役でカメラの前に立っている。

関連の出版：ルディ・シュトラール作 物語『僕の恋人ジビレ』、1967 年ベルリン、オイ



『僕の恋人ジビレ』エーファ=マリア・ハーゲンとハンス=ミヒャエル・シュミット

ンシュピーゲル出版

MEINE STUNDE NULL

『私の零時』

【監】ヨアヒム・ハスラー 【脚】ヨアヒム・ハスラー、ユーク・ベッカー、ゲルト・ゲリッケ 【協】カール・クルーク 【撮】ヨアヒム・ハスラー、ロルフ・シュラーデ 【音】ロマン・レデニオフ 【美】パウль・レーマン 【衣】マルレーネ・フレゼ 【編】バルバラ・ジモン 【制】ヴァルター・エーレ 制社】グループ「ヨハニスタール」 【長】2699m=99 分、カラー、cine、1969 年制作 封切】1970 年 4 月 28 日 【場所】ベルリン、「コスモス」/「インターナショナル」 【出】マンフレート・クルーク (ハルトウング)、アナトリー・クズネツォフ (ゴルニン)、クルト・ユング=アルゼン (シュテックベック)、グレイプ・ストリジェノフ (ネトレビン)、アルフレート・ミュラー (ブルームハーゲン)、レフ・ブリグノフ (ミーチャ)、フリード・ゾルター (ブランク)、ハリー・ヒンデミット (シェフラー)、ヴォルフガング・グレイゼ (シェフラー)、トーマス・ヴァイスゲルバー (ディーゲンハルト)、カール・シュトゥルム、エトヴィン・マリアン、ディートマー・リヒター=ライニク、ホルスト・シェーン、ハリー・ピーチュ他

ストーリー：1943 年の東部戦線。ベルリン出身の労働者で伍長のクルト・ハルトウングは爆撃を生き延びる。上官のシュテックベックが彼に不発弾処理の命令を下し、危うく命を落とすところだった。その直後、斥候に出た時ロシア軍の偵察兵に捕まる。捕虜になり、元々ナチスの同調者ではなかった彼は考えを改める。戦争を出来る限り早期に終結させねばならない。敵の軍事機密を入手するため、ロシア兵 2 名と共にドイツ人将校を誘拐する作戦に加わる。この計画は命がけの戦闘に思えたが運良く成功し、3 人は親密な同志になる。

解説：戦争をテーマに、初めて屈託のない素材を使って仕上げた作品。そのため倫理的問題や作品のジャンルに関する議論が起こった。観客動員ではヒットした作品である。

批評：今回の作品にはある種の戸惑いを感じられる。制作者はその点をじっくり検討すべきだった。同時に映画はこの内容もあり得たことを証明している。基本的な問題は歴史的现实が保証されているかどうか。もう 1 点は、戦争に関連して様々な衝撃を受けた体験や記憶等、何百万人もの我が共和国の感情を顧慮できているかである。(1970 年 フリードリヒ・ザーロウ、「フィルムシュピーゲル 11」)

ユーモアに反対するのではない。英雄視することに反対でもない。この作品では一方の極端からもう一方の極端に移ってしまう。正にこのような形式を巧みに適用することが、しばしば言われる「熟練した芸術家手腕」だろう。それが最近の作品には欠けているように思う。(1970 年 ハイッツ・ケルステン、『So viele Träume [こんなに多くの夢]』より)

コメント：ソ連は撮影のために軍のポツダム部隊の演習場を提供し、制作に協力した。- 映画監督で俳優のクルト・ユング=アルゼンは、1960 年以降もっぱらテレビ用の冒険



マンフレート・クルークがクルト・ユング=アルゼンを引っ張って進む